

名人長二

三遊亭圓朝

鈴木行三校訂・編纂

青空文庫

序

三遊亭圓朝子、曾て名人競と題し画工某及女優某の伝を作り、自ら之を演じて大に世の喝采を博したり。而して爾來病を得て閑地に静養し、亦自ら話術を演ずること能わず。然れども子が斯道に心を潜むるの深き、静養の間更に名人競の内として木匠長二の伝を作り、自ら筆を採りて平易なる言文一致体に著述し、以て門弟子修業の資と為さんとす。今や校合成り、梓に上せんとするに当り、予に其序を需む。予常に以為く、話術は事件と人物とを美術的に口述するものにして、音調の抑揚緩急得て之を筆にすること能わず、蓋し筆以て示すを得るは話の筋のみ、話術其物は口之を演ずるの外亦如何ともすること能わずと。此故に話術家必しも話の筋を作為するものにあらず、作話者必しも話術家にあらざるなり。夫れ然り、然りと雖も話術家にして巧に話の筋を作為し、自ら之を演ぜんか、是れ素より上乘なる者、彼の旧套を脱せざる昔話のみを演ずる者に比すれば同日の論にあらず。而して此の如きは百歳一人を出すを期すべからず。圓朝子は其話術に堪能なると共に、亦話の筋を作為すること拙しとせず。本書名人長二の伝を見るに立案斬新、可笑あり、可悲あり、変化少からずして人の意表に出で、而かも野卑猥褻の事なし。此伝の如きは誠に社会現時

の程度に適し、優に娯樂の具と為すに足る。然れども是れ唯話の筋を謂うのみ。其話術に至りては之を演ずる者の伎倆に依りて異ならざるを得ず。門弟子たるもの勉めずんばあるべけんや。若し夫れ圓朝子病癒ゆるの日、親しく此伝を演せば其妙果して如何。長二は木匠の名人なり、圓朝子は話術の名人なり、名人にして名人の伝を演ず、其靈妙非凡なるや知るべきのみ。而して聴衆は話の主人公たる長二と、話術の演術者たる圓朝子と、両々相對して亦是れ名人競たるを知らん。

乙未初秋

土子笑面識

これは享和二年に十歳で指物師清兵衛の弟子となつて、文政の初め廿八歳の頃より名人の名を得ました、長二郎と申す指物師の伝記でございませう。凡そ当今美術とか称えまする書画彫刻蒔絵などに上手というは昔から随分沢山ありますが、名人という者はまことに稀なものでございませう。通常より少し優れた伎倆の人が一勉強いたしますと上手にはなれませうが、名人という所へはたゞ勉強したぐらいでは中々参ることは出来ませぬ。自然の妙というものを自得せねば名人ではございませぬ。此の自然の妙というものは以心伝心とかで、手を以て教えることも出来ず、口で云つて聞かせることも出来ませぬゆえ、親が子に伝えることも成らず、師匠が弟子に譲るわけにもまいりませぬから、名人が二代も三代も続くことは滅多にございませぬ。さて此の長二郎と申す指物師は無学文盲の職人ではありますが、仕事にかけては当時無類と誉められ、江戸町々の豪商はいうまでもなく、大名方の鼻屑を蒙つたほどの名人で、其の拵えました指物も御維新前までは諸方に伝わつて珍重されて居りましたが、瓦解の時二束三文で古道具屋の手に渡つて、

何うかなつてしまいましたものと見えて、昨今は長二の作というものを頓と見かけません。世間でも長二という名人のあつた事を知っている者が少うございますから、残念でもありませんし、又先頃弁じました名人競のうち錦の舞衣にも申述べた通り、何芸によらず昔から名人になるほどの人は凡人でございませぬゆえ、何か面白いお話があろうと存じまして、それからそれへと長二の履歴を探索に取掛りました節、人力車から落されて少々怪我をいたし、打撲で悩みますから、或人の指図で相州足柄下郡の湯河原温泉へ湯治に参り、温泉宿伊藤周造方に逗留中、図らず長二の身の上にかゝる委しい事を聞出しまして、此のお話が出来上つたのでございます。是が真に怪我の功名と申すものかと存じます。文政の頃江戸の東両国大徳院前に清兵衛と申す指物の名人がござりました。是は京都で指物の名人と呼ばれた利齋の一番弟子で、江戸にまいって一時に名を揚げ、箱清といえは誰知らぬ者もないほどの名人で、当今にても箱清の指した物は好事の人が珍重いたすことで、文政十年の十一月五日に八十三歳で歿しました。墓は深川亀住町閻魔堂地中の不動院に遺つて、戒名を參清自空信士と申します。この清兵衛が追々年を取り、六十を越して思うように仕事も出来ず、女房が歿りましたので、弟子の恒太郎という器用な柔順しい若者を養子にして、娘のお政を娶わせましたが、恒太の伎倆はまだ鈍うご

ざいますから、念入の仕事やむずかしい注文を受けた時は、皆みんなな長二にさせます。長二は
 其の頃しよたい両親とも亡なくなりましたので、煮焚にたきをさせる雇やとい婆いばあさんを置いて、独身で本所しめきり切
 に世帯しよたいを持つて居りましたが、何ういうものですか弟子を置きませんから、下働くだわきをす
 る者に困り、師匠の末の弟子の兼かね松まつという気軽者を借りて、これを相手に仕事をいたし
 て居りますところが、誰たれいうとなく長二のことを不器用長二と申しますから、何所どこか仕事
 に下手なところがあるのかと思ひますに、左様そうではありません。仕事によつては師匠の清
 兵衛より優れた所があります。是は長二が他の職人に仕事を指図するに、何なんでも不器用に
 造るが宜いい、見かけが器用に出来た物に永なが持もちをする物はない、永持えいぢをしない物は道具に
 ならないから、表面うわべは不細工ぶさいくに見えても、十と百ひやく年ねんの後のちまでも毀こわれないように拵こしらえなけ
 りや本当の職人ではない、早く造りあげて早く錢を取りたいと思うような卑ひしい了簡りょうかんで拵
 えた道具は、何処どこにか卑ひしい細工こぎが出て、立派な座敷の道具にはならない、是は指物さしものばか
 りではない、画えでも彫ほり物ものでも芸人でも同じ事で、錢を取りたいという野卑ひどな根性こんじやうや、他
 に褒められたいという諂おべ諛つかがあつては美いい事は出来いないから、其様そのんな了簡りょうかんを打棄うちすつて、
 魂たまを籠めて不器用に拵こしらえて見ろ、屹度きつと美いい物が出来上るから、不器用にやんなさいと毎度
 申しますので、遂つひに不器用長二と綽名あだなをされる様になつたのだと申すことで。

二

不器用長二の話を、其の頃浅草蔵前に住居いたしました坂倉屋助七と申す大家の主人が聞きまして、面白い職人もあるものだ、予て御先祖のお位牌を入れる仏壇にしようと思つて購めて置いた、三宅島の桑板があるから、長二に指させようと、店の三吉という丁稚に言付けて、長二を呼びにやりました。其の頃蔵前の坂倉屋と申しては贅沢を極めて、金銭を湯水のように使いますから、諸芸人はなおさら、諸職人とも何卒鼻頂を受けたいと願う程でございますゆえ、大抵の職人なら最上等のお得意様が出来たと喜んで、何事を措いても直に飛んでまいるに、長二は三吉の口上を聞いて喜ぶどころか、不機嫌な顔色で断りましたから、三吉は驚いて帰つてまいりました。助七は三吉の帰りを待ちかねて店前きに出て居りまして、

助 「三吉何故長二を連れて来ない、留守だったか」

三 「いゝえ居りましたが、彼奴は馬鹿でございます」

助 「何と云つた」

三「坂倉屋だか何だか知らないが、物を頼むに人を呼付けるといふ事アない、己ア呼付けられてへい〜と出て行くような閑な職人じゃアねえと申しました」

助「フム、それじゃア何か急ぎの仕事でもしていたのだな」

三「ところが左様じゃアございません、鉋屑の中へ寝転んで煙草を吞んでいました、火の用心の悪い男ですなえ」

助「はてな……手前何と云つて行つた」

三「私ですか、私は仰しやつた通り、蔵前の坂倉屋だが、拵えてもらう物があるから直に来ておくんない、蔵前には幾軒も坂倉屋があるから一緒にまいりましょうと云つたんでございます」

助「手前入ると突然其の口上を云つて、お辞儀も挨拶もしなかつたろう」

三「へい」

助「それを失礼だと思つたのだろう」

三「だって旦那寝転んでいる方が余ほど失礼でしょう」

助「ム、それも左様だが、何か気に障つた事があるんだろう」

三「左様じゃアございません、全体馬鹿なんです」

助「むやみに他の事を馬鹿なんぞというものではございませんぞ」

と丁稚を誡めて奥に這入りましたが是まで身柄のある画工でも書家でも、呼びにやると直に來たから、高の知れた指物職人と侮つて丁稚を遣つたのは悪かつた、他の職人とは異つているとは聞いていたが、それ程まで見識のある者とは思わなんだ、今の世に珍らしい男である、御先祖様のお位牌を入れる仏壇を指させるには此の上もない職人だと見込みましたから、直に衣服を着替えて、三吉に詫言を云含めながら長二の宅へ参りました。長二は此の時出來上つた書棚に氣に入らぬ所があると申して、才槌で叩き毀そうとするを、兼松が勿体ないと云つて留めている混雑中でありますから、助七は門口に暫く控えて立聞きをして居りますと、

長「兼公、手前は然ういうけれどな、拵えた当人が拙いと思う物で錢を取るのは不親切というものだ、何家業でも不親切な了簡があつた日にア、梶のあがる事アねえ」
兼「それだつて此のくれえの事ア素人にア分りやアしねえ」

長「素人に分らねえから不親切だというのだ、素人には分らねえから宜いと云つて拙いのを隠して売付けるのは素人の目を盗むのだから盗人も同様だ、手前盗人をしても錢が欲しいのか、己ア此様な職人だが卑しい事ア大嫌いだ」

と丹誠を凝こらして造りあげた書棚をさい槌でばら／＼に打うち毀こわしました様子ゆえ、助七は驚おどろきました。益ます々並なみの職人でないと感服をいたし、やがて表の障子を明けまして、助「御免なさい、私わたくしは坂倉屋助七と申す者で、少々親方にお願ねがい申ましたい事があつて、先刻出でしました召使めいしの者が、早呑込みで粗相を申し、相済みません、其のお詫かた／＼、まいりました」

と丁寧ていねいに申し述べましたから、流石さすがの長二も驚おどろき、まご／＼する兼松に目くばせをして、其の辺に飛散ひさんつてゐる書棚の木屑こくずを片付けさせながら、

長「へい、これはどうも恐入おそいりました、此の通り取散とろかしてありますが、何卒どうぞ此方こちらへ」と蓆ござの上の匏屑かぶを振ふるつて敷直敷しますから、助七は会釈えいせきをして其処そこへ坐まりました。

三

助「御高名は予かねて承知おぼしていましたが、つい掛違かちがいまして」

長「私わたくしもお名前は存ぞんじて居ゐりますが、用もちがありませんからお目にかゝりませんでした、シテ御用と仰おほしやるのは」

助「はい、お願い申すこともございますが先刻のお詫をいたします……三吉……そこへ出てお詫をしろ」

三吉は不承々々な顔付で上り口に両手をつきまして、

三「親方さん先刻は口上を間違えまして失礼を致しました、何卒御免なさい」

とお辞儀をいたしますを、長二は不審そうに見ておりましたが、

長「へい何でしたか小僧さん、何も謝る事ありません……え、旦那……先刻お迎いでしたが、出ぬけられませんかからお断り申したんで」

助「それが間違いで、先刻三吉に、親方に願いたい事があるから宅に御座るか聞いて来いと申付けたのを間違えて、親方に来てくださるように申したとの事でございます」

長「ム、左様いう事ですか、訳さえ分れば宜いじやありませんか、それより御用の方をお聞き申しましょう」

助「そんならお話し申しますが、実は私先年から心掛けて、先祖の位牌を入れて置く仏壇を拵えようと思つて、三宅島の桑板の良いのを五十枚ほど購めましたが、此の仏壇は子孫の代までも永く伝わる物でもあり、又火事に焼けてならんものですから、非常の時は持つて逃げる積りです、混雑の中では取落す事もあり、又他から物が打付る事もあります

ゆえ、余ほど丈夫でなければなりません、丈夫一式で木口が橋板のように馬鹿に厚くつては、第一重くもあり、お飾り申した処が見にくくつて勿体ないから、一寸見た処は通例の仏壇のようで、大抵な事では毀れませんかのように、極丈夫に拵えたいという無理な注文でもございますし、それに位牌を入れる物ですから、成るべくは根性の卑しい粗忽な職人に指させたくないと思つて、職人を搜して居りました処、親方はお心掛が潔白で、指物にかけては京都の利齋当地の清兵衛親方にも優るといふ評判を聞及びましたから、此の仕事をお願い申したので、手間料には糸目をかけません、何うぞ私が先祖への孝行にもなる事でございますから、この絵図面を斟酌して一骨折つてはくださるまいか」

と仏壇の絵図面を見せると、長二は寸法などを見較べまして、

長「成程随分難かしい仕事ですが、宜うがす、此の工合に遣つてみましよう…だが急いじゃアいけませんよ、兎も角も板を遣してお見せなさい、板の乾き塩梅によつちやア仕事の都合がありますから」

助「はい、承知いたしました…：…そんなら明朝板をよこすことに致しましょう…：…え、是は少のうございますが、御注文を申した印までに上げて置きます」

と金子を十五両鼻紙に載せて差出しますを、長二は宜く見もいたさずに押戻しまして、

長「板をよこして注文なさるんですから手金なんぎア要りません、出来上つて見なければ手間も分りませんから、是はお預け申して置きます」

助「左様いう事ならお預かり申して置きますから、御入用の節は何時でも仰しやつてお遣わしなさい」

と金子を懷中に納めまして、

助「これはお仕事のお邪魔を致しました……そんなら何分宜しくお願い申します、お暇というはございますまいけれど、自然浅草辺へお出での節はお立寄り下さい」

と暇を告げて助七は立帰り、翌日桑の板を持たせて遣りましたが、其の後長二から何の沙汰もございません。助七は待遠でなりませんが、長二が急いではいけないと申した口上がありますから、下手に催促をしたら腹を立つだろうと我慢をして待つて居りますと、七月目に漸々出来上つて、長二が自身に持つてまいりましたから、助七は大喜びで、長二を奥の座敷へ通しました。此の時助七は五十三歳で、女房は先年歿つて、跡に二十一歳になる倅の助藏と、十八歳のお島という娘があります。助七は待ちに待つた仏壇が出来た嬉しさに、助藏とお島は勿論、店の番頭手代までを呼び集めて、一々長二に引合わせ、仏壇を見せて其の伎倆を賞め、長二を懇にもてなしました。

四

助「時に親方、つかん事を聞くようだが、先頃尋ねた折台所にいたのは親方のお母さんかね」

長「いゝえ、お母は私が十七の時死にました、あれは飯焚の雇い婆さんです」

助「そんなら未だ家内は持たないのかね」

長「はい、鼻があると銭のことばかり云つて仕事の邪魔になつていけませんから持たないんです」

助「親方のように稼げば、銭に困ることはあるまいに」

長「銭は随分取りますが、持つてゐる事が出来ない性分ですから」

助「職人衆は皆な然うしたものだ、親方は何が道楽だね」

長「何も道楽というものはないんですが、只正直な人で、貧乏をしている者を見ると気の毒でならないから、持つてゐる銭をくれてやりたくするのが病です」

助「フム良い病だ……面白い道楽だが、貧乏人に余り金を遣りすぎると却つて其の人の

害になる事があるから、気を付けなければいけません」

長「其のくれえの事ア知っています、其の人の身分相應に恵まないと、贅沢をやらかしていいけません」

助「感心だ……名人になる人は異つたものだ、のうお島」

島「左様でございます、誠に善いお心掛で」

と長二の顔を見る途端に、長二もお島の顔を見ましたから、お島は間の悪そうに眼もとをぼうツと赧くして下を向きます。長二は此の時二十八歳の若者で、眼がきりゝとして鼻筋がとおり、何処となく苦味ばしつた、色の浅黒い立派な男でございますが、酒は嫌いで、他の職人達が婦人の談でもいたしますと怒るといふ程の真面目な男で、只腕を磨く一方にのみ身を入れて居りますから、外見も飾りもございません。今日坂倉屋へ注文の品を納めにまいりますにも仕事着のまゝで、膝の抜けかゝつた盲縞の股引に、垢染みた藍の万筋の木綿袴の前をいくじなく合せて、縄のような三尺を締め、袖に鉤裂のある印半纏を引掛けていて、動くたんびに何処からか鋸屑が翻れるという始末でございますから、お島は長二を美しい男とは思いませんが、予て父助七から長二の行いの他に異つていることを聞いて居ります上に、今また年に似合わぬ善い心掛なのを聞いて深く心に感

じ、これにひきかえて兄の助藏が放蕩に金銭を使い捨てるに思い較べて、窃かに恥じましたから、ちよつと赤面致したので、また長二もお島を見て別に美しいとも思いませんが、是まで貧民に金銭を施すのを、職人の分際で余計な事だ、馬鹿々々しいから止せと留める者は幾許もありましたが、褒める人は一人もありませんでしたに、今十七か十八のお嬢さんが褒めたのでありますから、長二は又お島が褒めた心に感心を致して、其の顔を見たのでございます。助七はそれらの事に毫も心づかず、

「親方の施し道楽は至極結構だが、女房を持たないと活計向に損がありますから、早く良いのをお貰いなさい」

長「そりやア知つていますが、女という奴ア吝なもんで、お嬢さんのように施しを褒めてくれる女はございませんから持たないんです」

助「フム左様さ、女には教えがないから、仁だの義だのという事は分らないのは道理だ、此の娘なぞは良い所へ嫁に遣ろうと思つて、師匠を家へ呼んで、読書から諸芸を仕込んだのだから、兎も角も理非の弁別がつくようになったんだが、随分金がかゝるから大抵の家では女にまでは行届きません、それに女という奴は嫁入りという大物入がありませんから、物入と云やア娘も其の内何処かへ嫁に遣らなければなりません、其の時の

箆筒三二重と用箆筒を親方に願いたい、何卒心懸けて木の良いのを見付けてください」

長「畏まりましたが、先達て職人の兼という奴が、鑿で足の拇指を突切った傷が破傷風にでもなりそうで、甚く痛むと云いますから、相州の湯河原へ湯治にやろうと思いますが、病人を一人遣る訳にもいきませんから、私も幼さい時怪我をした背中の旧傷が暑さ寒さに悩みますので、一緒に行つて序でに湯治をして来ようと思ひますので、お急ぎではどうも」

助「いゝや今が今というのではありません、行儀を覚えさせるため来月お出入邸の筒井様の奥へ御奉公にあげる積りですから、娘が下るまで宜いんです」

長「そんなら拵えましょう」

助「湯河原は打撲と金瘡には能いというから、緩り湯治をなさるが宜い、就てはこの仏壇の作料を上げましょう、幾許あげたらよいね」

長「左様……別段の御注文でしたから思召に適うように拵えしましたので、思ったより手間がかゝりましたが……百両で宜うございます」

其の頃の百両と申す金は当節の千両にも向う大金で、如何に念入でも一個の仏壇の細工料が百両とは余り法外でございますから、助七は恟りして、何にも云わず、暫く長二の顔

を見詰めて居りました。

五

助七は仏壇の細工は十分心に適つて丈夫そうには出来たが、百両の手間がかゝつたとは思えません、これは己が余り褒めすぎたのに附込んで、己の家が金持だから法外の事をいうのであろう、扱さては此奴こいつは潔白な気性だと思いの外ほか、卑しい簡の奴だなど腹が立ちましたから、

助「おい親方、この仏壇の板は此方こつちから出したのだよ、百両とはお前間違ひではないか」

長「へい、板を戴いた事ア知つています、何も間違ひではございません」

助「是だけの手間が百両とは少し法外ではないか」

長「そう思召しましょうが、それだけ手間がかゝつたのです、百両出せないと仰しやるなら宜うがす元の通りの板をお返し申しますから仏壇は持つて帰ります……素人衆には分りますまいよ」

と云いながら仏壇を持ちて帰ろうといたしますから、助七が押留おしとめまして、

助「親方、まア待ちなさい、素人に分らないというが、百両という価値の細工が何処にあるのだえ」

長「はい……旦那御注文の時何と仰しやいました、この仏壇は大切の品だから、火事なぞで持出す時、他の物が打付つても、又落としても毀れないようにしたいが、丈夫一式で見てくれが拙くつては困ると仰しやつたではございませんか、随分無理な注文ですが、出来ない事はありませんから、釘一本他手にかけて一生懸命に精神を入れて、漸々御注文通りに拵え上げたのです……私ア注文に違つてる品を瞞かして納めるような不親切をする事ア大嫌えです……最初手間料に糸目をつけないと仰しやつたから請負つたので、斯ういう代物は出来上つてみないと幾許戴いて宜いかわりません、此の仏壇に打つてある六十四本の釘には一本く私の精神が打込んでありますから、随分安い手間料だと思います」

助「フム、その講釈の通りなら百両は安いものだが、火事の時竹長持の棒でも突かけられたら此の辺の合せ目がミシリといきそうだ」

長「その御心配は御道理ですが、外から何様な物が打付つても釘の離れるようなことア決してありませんが中から強く打付けては事によると離れましよう、併し仏壇ですか

ら中から打付かるものは花立が倒れるとか、香炉が転るぐれえの事ですから、氣遣えはございませぬ、嘘だと思召すなら丁度今途中で買つて来た才榎を持ってますから、これで打擲つてごらんなせい」

と腰に挿していた櫂の才榎を助七の前へ投出しました。助七は今の口上を聞き、成ほど普通の品より、手堅く出来てはいようが、元々釘で打付けたものだから叩いて毀れぬ事はない、高慢をいうにも程があると思ひましたゆえ、

助「そりやア親方が丹誠をして拵えたのだから少しぐらいの事では毀れもしまいが、此の才で擲つて毀れないとは些と高言が過るようだ」

と嘲笑いましたから、正直一途の長二はむつと致しまして、

長「旦那……高言か高言でねえか打擲つてごらんなせい、打擲つて一本でも釘が弛んだ日にやア手間は一文も戴きませぬ」

助「ム、面白い、此の才榎で力一ぱいに叩いて毀れなけりやア千両で買つてやろう」

と才榎を持つて立上りますを、先刻から心配しながら双方の問答を聞いていましたお島が引留めまして、

島「お父さん……短気なことを遊ばしますな、折角見事に出来ましたお仏壇を」

助「見事か知らないが、己には気に入らない仏壇だから打毀すのだ」

島「ではございませうが、このお仏壇をお打ちなさるのは御先祖様をお打ちなさるよ
うなものではございませんか」

助「ム、左様かな」

と助七は一時お島の言葉に立止りましたが、扱は長二の奴も、先祖の位牌を入れる仏壇
ゆえ、遠慮して吾が打つまいと思つて、斯様な高言を吐いたに違いない、憎さも憎し、見
事叩つ毀して面の皮を引剥いてくりよう。と額に太い青筋を出して、お島を押退けながら、

助「まだお位牌を入れないから構う事アない……見ていろ、ばら／＼にして見せるから」

と助七は才榿を揮り上げ、力に任せて何処という嫌いなく続けざまに仏壇を打ちました
が、板に瑕が付くばかりで、止口釘締は少しも弛みません。助七は大家の主人で重い
物は傘の外持った事のない上に、年をとって居りますから、もう力と息が続きませんので、
呆れて才榿を投り出して其処へ尻餅をつき、せい／＼いって、自分で右の手首を揉みなが
ら、

助「お島……水を一杯……速く」

と云いますから、お島が急いで持つてまいった茶碗の水をグツと呑みほして太息を吐

き、顔色を和げまして、

助「親方……恐入りました……誠に感服……名人だ……名人の作の仏壇、千両でも安い、約束通り千両出しましょう」

長「アハ、精神を籠めた処が分りましたか、私ア自慢をいう事ア大嫌いだ、それさえ分れば宜うが、此様に瑕が付いちやア道具にはなりませんから、持って帰って其の内に見付かり次第、元の通りの板はお返し申します」

助「そりやア困る、瑕があつても構わないから千両で引取ろうというのだ」

長「千両なんて価値はありません」

助「だつて先刻賭をしたから」

長「そりやア旦那が勝手に仰しやつたので、私ア千両下さいと云つたのじアねえのです、私ア賭事ア性来嫌いです」

助「左様だろうが、これは別物だ」

長「何だか知りませんが、他の仕事を疑ぐるといふのが全体気にくわないから持つて帰るんです、銭金に目を眩れて仕事をする職人じやアございませぬ」

と仏壇を持出しそうにする心底の潔白なのに、助七は益々感服いたしまして、

助「まあ待つてください……親方……私がお前の仕事を疑ぐつて、折角丹誠の仏壇を暇物にしたのは重々わるかった、其処んところは幾重にもお詫をしますから、何卒仏壇は置いて行つてください」

長「だつて此様に瑕が付いてるものは上げられねえ」

助「それが却つて貴いのだ、聖堂の林様はお出入だから殿様をお願い申して、私が才槌で瑕をつけた因由を記いて戴いて、其の書面を此の仏壇に添えて子孫に譲ろうと思ひますから、親方機嫌を直して下さい」

と只管に頼みますから、長二も其の考えを面白く思ひ、打解けて仏壇を持歸るのを見合せましたから、助七は大喜びで、無類の仏壇が出来た慶びの印として手間料の外に金百両を添えて出しましたが、長二は何うしてもこれを受けませんで、手間料だけ貰つて帰りました。助七は直に林大學頭様の邸へ参り、殿様に右の次第を申し上げますと、殿様も長二の潔白なる心底と伎倆の非凡なるに感服されましたから、直に筆を執つて前の始末を文章に認めて下さいました。其の文章は四角な文字ばかりで私どもには読めませんが、是も亦名文で、今日になつては其の書物ばかりでも大層な価値があると申す事でございませぬ。斯様に林大學頭様の折紙が付いている宝物で、私も一度拝見しましたが御維新

後坂倉屋が零落おちぶれまして、本所横網よこあみ辺へ引込ひっこみました時隣家より出た火事に仏壇も折紙も一緒に焼いてしまったそうで、如何にも残念な事でございます。それは後の話のちで此の仏壇の事が江戸市中の評判となり、大學頭様も感心なされて、諸大名や御旗おはたもと下衆へ吹聴をなされましたから、長二の名が一時に広まつて、指物師の名人と云えば、あゝ不器用長二かというように名高くなりまして、諸方から夥おびたしく注文がまいります、手伝の兼松は足の疵きずで悩み、自分も此の頃の寒気のため背中の旧疵ふるきずが疼いたみ、当分仕事が出来ないと云つて諸方の注文を断り、親方清兵衛あつとに後を頼んで、文政三辰年たつとしの十一月初旬はじめ、兼松を引連れ、湯治のため相州湯河原の温泉へ出立いたしました。

六

湯河原の温泉は、相州足柄下郡宮上村みやかみむらと申す処にございまして、当今は土肥次郎實平どいじろうさねひらの出た処というので土肥村と改まりまして、城堀村しろほりむらにある實平の城山は、真鶴港まなづるみなとから上陸して、吉浜よしはまを四五丁まいると向うに見えます。吉浜から宮上村まで此の間は爪先上りの路みちで一里四丁ほどです。温泉宿は湯屋（加藤廣吉かとうひろきち）藤屋（加藤文左衛門かとうぶんざえもん）藤田屋

(加藤林平) 上野屋 (渡邊定吉) 伊豆屋 (八龜藤吉) などで、当今は伊藤周造に
 天野某あまのものがしなどという立派な宿も出来まして、何れも繁昌いすいたしますが、文政の頃は藤屋が盛ん
 でしたから、長二と兼松は此の藤屋へ宿を取りました。温泉は川岸から湧出わきだしまして、石
 垣で積上げである所を惣湯そうゆと申しますが、追々開けて、当今は河中かわなかの湯、河下の湯、
 儘根まくねの湯、下の湯、南岸みなみぎしの湯、川原かわらの湯、薬師やくしの湯と七湯しちとうに分れて、内湯を引いた
 宿が多くなりました。湯の温度は百六十三度乃至百五度ぐらいで、打撲うちみきりきず金瘡きんそうは勿論、胃
 病、便秘、子宮病、偻麻質私りようましずなどの諸病に効能きくぬがあると申します。西は西山、東は上野山、
 南は向山むこうやま、北は藤木山ふじきやまという山で囲まれている山間やまあいの村で、総名そうみょうを本沢ほんざわと
 申して、藤木川、千歳川ちとせがわという川が通っております。此の藤木川の流ながれが、当今静岡県
 と神奈川県さかひの境界さかいになつて居ります。千歳川の下に五所明神ごしよめいじんという古い社やしろがあります。此
 の社を境にして下の方を宮下村みやしたむらと申し、上の方を宮上村みやかみと申すので、宮下の方は戸数八
 十余あまり、人口五百七十ばかり、宮上村は湯河原のことで、此の方は戸数三十余、人口二百七
 十ばかりで、田畑が少のうございますから、温泉宿の外は近傍もよりの山々から石を切出したり、
 炭を焼いたり、種々しゆづの山稼やまがぎをいたして活計くわしを立っている様子です。此の所から小田
 原まで五里十九丁、熱海まで二里半余よで、何れへまいるのにも路みちは宜しくございせんが、

温泉のあるお蔭で年中旅客が絶えず、中々繁昌をいたします。さて長二と兼松は温泉宿藤屋に逗留して、一一週ほど湯治をいたしたので、忽ち効験が顕われて、兩人とも疵所の疼みが薄らぎましたから、少し退屈の気味で、

兼「長兄い……不思議だな、一昨日あたりからズキ／＼する疼みが失ってしまった、能く利く湯だなア」

長「それだから此様な山人中へ来る人があるんだ」

兼「本当に左様だ、怪我でもしなけりやア来る処じやアねえ、此処え来て見ると怪我人もあるもんだなア」

長「ム、伊豆相模は石山が多いから、石切職人が始終怪我をするそうだ、見ねえ来ている奴ア大抵石切だ、どんな怪我でも一週か二週で癒るということだが、好い塩梅にしたもんじやアねえか、そういう怪我を度々する処にやア、斯ういう温泉が湧くてえのは」

兼「それが天道人を殺さずというのだ、世界の事ア皆んな其様な塩梅に都合よくなつてゐるんだけど、人間というお世話やきが出てごちやまかして面倒くさくしてしまつたんだ」

長「旨い事を知つてるなア、感心だ」

兼「旨いと云やア、それ此処こけえ来る時、船から上つて、ソレ休んだ処とこア何なんとか云つたつけ」

長「浜辺の好い景色の処ところか」

兼「左様そうよ」

長「ありやア吉浜という処ところよ」

兼「それから飯を喰つた家うちは何とか云つたつけ」

長「橋本屋よ」

兼「ム、橋本屋だ、彼家あすこで喰つた※の煮肴めばるは素的すてきに旨かつたなア」

長「魚が新らしいのに、船で臭くせえ飯を喰つた挙句あげくだつたからよ」

兼「そうかア知らねいが、今に忘れられねえ、全体ぜんてい此こ辺はまかたは浜方はまかたが近いにしちやア魚が少ねえ、鯛ひらめに比目魚めばるか※に、それでなけりやア方頭魚あまていと毎日の御馳走ごちそうが極つてゐるのに、料理方かたがいろ／＼して喰わせるのが上手だぜ」

長「そういうと豪氣ごうぎに宅うちで奢あやつてるようだが、水みづ漬づけをませてこせえた婆おばさんの物もの菜さいよりア旨旨かろう」

兼「そりやア知れた事だが、湯治とか何とか云やア贅沢が出るもんだ」
 長「贅沢と云やア雉子の打たてだの、山鳩や鶉は江戸じやア喰えねえ、此間のア旨か
 ったらう」

兼「ム、あれか、ありやア旨かった、それに彼の時喰った大根ぎ、此方の大根は甘味が
 あつて旨え、それに沢庵もおつだ、細くつて小せえが、甘味のあるのは別だ、自然薯も
 本場だ、こんな話をするとか何か喰いたくなつて堪らねえ」

長「よく喰いたがる男だ、折角疵が癒りかけたのに油濃あぶらっこい物を喰つちやア悪いよ」
 兼「毒になるものア喰やアしねいが、退屈だから喰う事より外ア楽たのしみがねえ……蕎麦粉
 の良いのがあるから打つてもらおうか」

長「己おらア喰いたくねえが、少し相伴つきあおうよ」
 兼「そりやア有難い」

と兼松が女中を呼んで蕎麦の注文を致します。馴れたもので程なく打あげて、見なれな
 い婆さんが二階へ持つてまいりました。

兼「こりやア早い、いや大きに御苦労……兄い「杯やるか」

長「己ア飲まないが、手前一本やんない」

兼「そんなら婆さん、酒を一合つけて来てくんねえ」

婆「はい、下物はどうかね」

兼「何があるえ」

婆「鯛と鶏卵の汁があるがね」

兼「それじゃア鯛の塩焼に鶏卵の汁を二人前くんねえ」

婆「はい、直に持つて来やす」

と婆さんは下へ降りてまいりました。

長「兼公見なれねえ婆さんだなア」

兼「宅の婆さんよりア穢ねえようだ、あの婆さんの打った蕎麦だと醬汁はいらねいぜ」

長「なぜ」

兼「だって水漬で塩気がたつぷりだから」

長「穢ねいことをいうぜ」

と蕎麦を少し摘んで喰つてみて、

兼「そんなに馬鹿にしたものじゃアねえ、中々旨え……兄い喰つてみねえ……おゝ婆さん、お爛が出来たか」

婆「大きに手間取りやした、お酌をしますかえ」

兼「一杯頼もうか……婆さんなか／＼お酌が上手だね」

婆「上手にもなるだア、若い時から此家でお客の相手えしたからよ」

兼「だつてお前今日初めて見かけたのだぜ」

婆「左様だがね、私イ三十の時から此家へ奉公して、六年前に近所へ世帯を持ったのだが、忙しねえ時ア斯うして毎度手伝に来るのさ、一昨日おせゆッ娘が塩梅がわりいつて城堀へ帰つたから、当分手伝えに来たのさ」

兼「ム、左様かえ、そうして婆さんお前年は幾歳だえ」

婆「もうはア五十八になりやす」

兼「兄い、田舎の人は達者だねえ」

長「どうしても体に骨を折つて欲がねえから、苦勞が寡いせいだ」

婆「お前さん方は江戸かえ」

長「そうだ」

婆「江戸から来ちやア不自由な処だつてねえ」

長「不自由だが湯の利くのには驚いたよ」

婆「左様かねえ、お前さん方の病氣は何だね」

兼「己のア是だ、この拇指を鑿で打切つたのだ」

婆「へえー怖ねいこんだ、石鑿は重いてえからねえ」

兼「己ア石屋じやアねえ」

婆「そんなら何だね」

兼「指物師よ」

婆「指物とア：ム、箱を拵えるのだね、：不器用なこんだ、箱を拵える位えで足い鑿い打貫すとア」

長「兼公一本まいったなア、ハハ、」

婆「笑うけど、お前さんのも矢張其の仲間かね」

長「己のは左様じやアねえ、子供の時分の旧疵だ」

婆「どうしたのだね」

長「どうしたのか己も知らねえ」

婆「そりやア変なこんだ、自分の疵を当人が知らねいとは……矢張足かね」

長「いゝや、右の肩の下のところだ」

婆「背中かね……お前さん何歳の時だね」

長「それも知らねいのだが、この拇指の^{へえ}入るくれえの穴がポカンと開^あいていて、暑さ寒さに痛んで困るのよ」

婆「へいー左様かねえ、孩^{ね、こ}児の時そんな疵うでかしちやアおつ死^ちんでしまうだねえ、どうして癒^いつたかねえ」

長「どうして癒^いつたどころか、自分に見えねえから此^こ様な疵のあるのも知らなかつたのさ、九^{こ、の}歳の夏のことだっけ、河へ泳ぎに行くと、友達が手^て前の背中にア穴が開いてると云つて馬鹿にしやがったので、初めて疵のあるのを知つたのよ、それから宅^{うち}へ歸^けつてお母^{ふくろ}に、何うして此様な穴があるのだ、友達が馬鹿にしていけねえから何うかしてくれろと無理をいうと、お母が涙ぐんでノ、その疵の事を云われると胸が痛くなるから云つてくれるな、他^{ひと}に其の疵を見せめえと思つて裸^{はだか}体で外へ出したことのねえに、何故泳ぎに行ったのだと云つて泣くから、己もそれつきりにしておいたから、到頭分らずじまいになつてしま

つたのよ」

という話を聞きながら、婆さんは長二の顔をしげくと見詰めておりました。

八

婆「はてね……お前めえさんの母かゝさま様というは江戸者かねえ」

長「何故だえ」

婆「些ちと思ひ出した事があるからねえ」

長「フム、己の親は江戸者じやアねえが、何処どこの田舎だか己おらア知らねえ、何でも己おれが五歳つの時田舎から出て、神田の三河町へ荒物店みせを出すと間もなく、寛政九年の二月だと聞いているが、其の時の火事に全焼まるやけになつて、其の暮とつに父とつさんが死んだから、お母ふくろが貧乏ふくろの中で丹誠して、己とが十歳とおになるまで育つてくれたから、職を覚えてお母に安心させようと思つて、清兵衛親方という指物師の弟子になつたのだ」

婆「左様そかねえ、それじやア若もしかお前めえさんの母様はおさなさんと云わねいかねえ」

長「あゝ左様だ、おさなと云つたよ」

婆「父様はえ」

長「父さんは長左衛門さま」

婆「アレエ魂消たねえ、お前さん……長左衛門殿の拾児の二助どんけえ」

長「何だと己が拾児だと、何ういうわけでお前そんな事を」

婆「知らなくつてねえ、此の土地の棄児だものを」

長「そんなら己は此の湯河原へ棄てられた者だというのかえ」

婆「そうさ、此の先の山を些と登ると、小滝の落ちてる処があるだ、其処の蘆ツ株の中

へ棄てられていたのだ、背中の疵が証拠だアシ」

兼「これは妙だ、何処に知ってる者があるか分らねえものだなア」

長「こりやア思いがけねえ事だ……そんなら婆さんお前己の親父やお母を知ってるかね」

婆「知ってるどころじゃアない」

長「そうして己の棄てられたわけも」

婆「ハア根こそげ知ってるだア」

長「左様かえ……そんなら少し待つてくんない」

と長二は此の先婆さんが如何様のことを云出すやも分らず、次第によつては実の両親の

身の上、又は自分の恥になることを襖越しの相客などに聞かれては不都合と思ひましたから、廊下へ出て様子を窺うかがいますと、隣座敷の客達は皆みんなな遊びに出て留守ですから、安心をして自分の座敷に立戻り、何程かの金子を紙に包んで、

長「婆さん、こりやア少ねえがお前に上げるから煙草でも買いなさい」

婆「これはマアでかくお貰い申してお氣の毒なこんだ」

長「其の代り今の話を委くわしく聞かしてください、他に聞えると困るから、小さな声でお願ねがいだよ」

婆「何を困るか知んねいが、湯河原じゃア知らねい者は無いだけんどね、私わしが一番よく知つてるといふのア、その孩ね、つこ児……今じやア此こ様なに大でくなつてゐるが、生れたばかりのお前めえさんを苛むじくしたのを、私わしの眼の前に見たのだから」

長「そんならお前めえ、己おのの實ほんの親達も知つてゐるのか、何処なんの何なにという人だえ」

婆「何処の人か知んねえが、私わしが此家こつちへ奉公あくとしに来た翌あくる年の事ことだから、私わしがハア三十一の時だ、左様すると……二十七年前めえのこんだ、何でも二月の初はじめだった、孩ね児こを連れて夫婦の客人はなれが来て、離家はなれに泊とどつて、三日ばかりいたのサ、私わしの孩ね児この世話くたひアして草臥くたひれたから、次の間に打倒うちたおれて寝ねてしまつて、夜半よなかに眼さま覚さすと、夫婦喧嘩けんかがはだかつて居る

のサ、女の方で云うには、好い塩梅あんべいに云いくるめて、旦那おつに押かぶして置いたが、此の児こはお前めいさんの胤たねに違ちげい無ねいというと、男の方では月つきイ勘定かていすると一ひとつき月違ちがうから己おのれの児こじやア無ねい、顔かほまで好よく彼奴あいつに似にていと云うと、女は腹はらア立たつて、一月ひとつきぐれえは勘定かていを問ま違ちがえる事こともあるもんだ、お前めえのように実じつの無ねいことを云いわれちやア苦勞くろうをした効けいがねい、私わしももう彼あの家うちに居いねい了しまりだから、此この児こはお前めえの勝手かてにしたが宜ええと孩児わらわを男おとこの方かたへ打ぶんなげたと見みえて、孩児わらわが啼なくだアね、其そのの聲こゑで何を云いつてるか聞きえなかつたが、何でも男おとこの方も腹はらア立たつて、また孩児わらわを女おんなの方かたへ投なげすと、女おんながまた打なげたと見みえてドツシンとつしんと音おとがアして、果はてにア孩児わらわの聲こゑも出いなくなつて、死しぬだんべいと思おもつたが、外そとの事ことてねえから魂たま消きえているうち、ぐずぐず口くち小言こごゑを云いいながら夫婦ふうふとも眠ねてしまつた様子ようすだつたが、翌あくるひ日の騒さわぎが大おほ変へんさ

長「フム、どういふ騒さわぎだツたね」

婆ばあ「これからお前めえさんの背せ中の穴あなの話はなしになるんだが、此この前めえ江戸えどから来きた何なんとか云いつた落語家らくごかのように、こけえらで一ひと節ふし休やすむんだ、喉のどが乾かわいてなんねいから

兼「婆ばあさん、なか／＼旨うめえもんだ、サアこゝへ茶ちやを注ついで置おいたぜ」

婆ばあ「ハアこれは御馳走ごちそうさま……一息ひとやすみついて直すくに後あとを話はなしますべい」

九

兼「婆さん、それから何うしたんだ、早く話してくんなせえ」

婆「ハア、それからだ、其の翌あくるひ日の七ななつさかり時ときであつたがね、吉浜にいる知合しりえいを尋ねて復帰またえつて来るから、荷物は預けて置くが、初めて来たのだからと云つて、勘定をして二人が出て行つたサ、其の日長左衛門殿でんが山へ箱根竹はこねだけイ芟きりに行つて、日暮ひくれに下りて来ると、山の下で孩児なきこえの啼な声こゑがするから、魂消たまげて行つて見ると、沢の岸の、茅かやだの竹たけの生へえている中に孩児なきこえが火の付いたように啼ないてるから、何うしたんかと抱上げて見ると、どうだんべい、可愛かわいそうに竹たけの切き株かぶが孩児なきこえの肩かたのところへ突つ刺さつていたんだ、これじゃア大人でも泣かずにやア居られねい、打捨うちやて置おこうもんならおツ死ちんでしまうから、長左衛門殿でんが抱かいて帰かへつて訳わけえ話わしたから、おさなさんも魂消たまげて、吉浜の医者いしやどんを呼びよびにやるやらハア村中の騒さわぎになつたから、私わしが行いつて見ると、藤屋ふじやの客人きやくの子こだから、直すぐに帰かへつて何処どこの人ひとだか手掛てがかりイ見み付つけようと思おもつて客人きやくが預あづかりて行いつた荷物にものを開ひけて見ると、梅うめ醬じょうの曲物まげものと、油あぶら紙かみに包あんだ孩児なきこえの襁褓しめしばかりサ、そんで二人とも棄兒すてこをしに

来たんだと分つたので、直に吉浜から江の浦小田原と手分てわけえして尋ねたが知んねいでした、何でも山越しに箱根の方へ遁ぬげたこんだろうと後あとで評議へいぎイしたことサ、孩児は背中の疵でけが大でえに血がえらく出たゞから、所詮助かるめいと医者どんが見放したのを、長左衛門殿夫婦が夜も寝ねいで丹誠して、湯へ入れては疵口を湯でなで、看護をしたところが、効験きくめんは恐ろしいもんで、六週むまわりも経つただねえ、大でえ穴にはなつたが疵口が癒いつてしまつて、達者になつたのだ、寿命のある人は別なもんか、助かるめいと思つたお前めいさんが此こ様なでかに大でくなつたのにやア魂消たまやした」

兼「ム、それじゃア兄あにいは此の湯河原の温泉のお蔭で助かつたのだな」

長「左様そうだ、温泉の効能も効能だがお母や親父の手当が届いたからの事だ、他人の親でせえ其様そんななに丹誠だんせいしてくれるのに、現げん在ざい血を分けた親でいながら、背中へ竹の突通つとるほど赤坊あかんぼを敷なの中なえ投ほうり込んで棄すてるとア鬼おにのような心だ」

と長二は両眼りょうがんに涙なみだを浮うかめまして、

長「婆おばさん、そうしてお前めえその児こを棄すてた夫婦ふうふの形なりや顔かほを覚えてるだろう、何様どんな夫婦ふうふだつたえ」

婆「ハア覚おぼえていやすとも、苛むじい人ひとだと思つたから忘れねいのさ、男おとこの方は廿五六にじゅうごでも

あつたかね。商^{あきゆうど}人でも職人でも無い^ね好い男で、女の方は十九か廿歳^{はたち}ぐらいで色の白い、髪^{まつくろ}の真黒^{まなこ}な、眼^{まなこ}が細くつて口元の可愛^{かえい}らしい美しい女で、縞縮緬^{しまちりめん}の小袖^{わし}に私^{わし}イ見たこと^ねの無い黒^{くろ}え革^{くわ}の羽織^ねを着ていたから、何^なという物^{もの}だと聞いたら、八幡^{やわたぐろ}黒^{くろ}の半纏^{はんまぎ}革^{くわ}だと云^いつたつ^つけ」

兼「フム、少し婀娜^{あだ}な筋^{すぢ}だな、何者^{なにもの}だろう」

長「何者^{なにもの}だつて其様^{そのさま}な奴^{やつ}に用^{もち}はねえ、婆^{ばあ}さん此^この疵^{きず}は癒^なつても乳^{ちち}の無い^ねので困^{まど}つたらうねえ」

婆「そうだ、長左衛門殿^{どん}とおさなさんが可愛^{かわえ}がつて貰^{もら}い乳^{ちち}イして漸^{よう}々に育^{そだ}つて、其^{その}の時^{とき}名主様^{なぬさま}をしていた伊藤様^{いとうさま}へ願^{ねが}つて、自分^{おれ}の子^こにしたがね、名前^{なまえ}が知^しんねいと云^いつたら、名主様^{なぬさま}が、お前^{めえ}達^{たち}二人^{ふにん}の丹誠^{にんじやう}で命^{いのち}を助^{たす}けたのだから二助^{にすけ}としろと云^いわしやつた、何^{なに}がさて名主様^{なぬさま}が命^{いのち}名親^{なつけおや}だんべい、サア村^{むら}の者^{もの}が可愛^{かわえ}がるめいことか、外^{そと}へでも抱^{かか}いて出^でると、手^てから手^て渡^{わた}して、村^{むら}境^{さかい}まで行^いつてしま^まう始^{はじ}末^{まつ}さ、私^{わし}らも宜^よく抱^{かか}いて守^{もり}をしたんだが、今^{いま}じゃア大^{おほ}くなつてハア抱^{かか}く事^{こと}ア出^で来^こねえ」

兼「冗談^{じやうたん}じゃアねえ、今^{いま}抱^{かか}かれてたま^たまるものかな……そうだが兄^{あに}い……不思議^{ふしぎ}な婆^{ばあ}さんに逢^あつたので、思^{おも}いがけねえ事^{こと}を聞^きいたなア」

長「ウム、初めて自分の身の上を知った、道理で此の疵のことをいうとお母が涙ぐんだのだ……兼……己の外聞になるから此の事ア決して他に云つてくれるなよ」

十

長「婆さん、お願いだからお前も己のことを此家の人達へ内しよにしていってくんなせえ……これは己の小さい時守をしてくんなすつたお礼だ」

とまた幾許か金を包んで遣りますと、婆さんは大喜びで、

婆「此様に貰つちやア気の毒だが、お前さんも出世イして、斯んな身分になつて私も嬉しいからお辞儀イせずに戴きやす……私イ益もねいこんだ、お前さんのことを何で他に話すもんかね、氣遣えしねいが宜い」

長「何分頼むよ、お前のお蔭で委しい事が知れて有難え……ム、そうだ、婆さん、お前その、長左衛門の先祖の墓のある寺を知つてるか」

婆「知つてますよ、泉村の福泉寺様だア」

長「泉村とア何方だ、遠いか」

婆「なアにハア十二丁べい下だ、明日私が案内しますべいか」

長「それには及ばねえよ」

婆「左様かね、そんなら私イ下へめえりやすよ、用があつたら何時でも呼ばらっしゃい」と婆さんが下へ降りて行つた後で、長二は己を棄てた夫婦というは何者であるか、又夫婦喧嘩の様子では、外に旦那という者があるとすれば、此の男と馴合で旦那を取つて居たものか、但しは旦那というが本当の亭主で、此の男が奸夫かも知れず、何にいたせ尋常の者でない上に、無慈悲千万な奴だと思えますれば、真の親でも少しも有難くございませぬ、それに引換え、養い親は命の親でもあるに、死ぬまで拾子ということを知らさず、生の子よりも可愛がつて養育された大恩の、万分一も返す事の出来なかつたのは今さら残念な事だと、既往を懐いめぐらして鬱ぎはじめましたから、兼松が側から種々と言い慰めて気を散じさせ、翌日共に泉村の寺を尋ねました。寺は曹洞宗で、清谷山福泉寺と申して境内は手広でございりますが、土地の風習で何れの寺にも境内には墓所を置きませんで、近所の山へ葬りまして、回向の時は坊さんが其の山へ出張る事ですから、長二も福泉寺の和尚に面会して多分の布施を納め、先祖の過去帳を調べて両親の戒名を書入れて貰い、それより和尚の案内で湯河原村の向山にある先祖の墓に参詣いたしたので、婆さん

は喋りませんが、寺の和尚から、藤屋の客は棄児の二助だということが近所へ知れかゝつて来ましたから、疵の痛みが癒つたを幸い、十一月の初旬はしめに江戸へ立帰りました。さて長二はお母が貧乏の中で洒すくぎ洗濯や針仕事をして養育するのを見かね、少しにても早くお母の手助けになろうと、十歳の時自分からお母に頼んで清兵衛親方の弟子になったのですから、親方から貰こづかいう小遣ぜに銭はいうまでもなく、駄菓子でも焼やき薯いもでもしまつて置いて、仕事場の隙すきを見て必ずお母のところへ持つてまいりましたから、清兵衛親方も感心して、他の職人より目をかけて可愛がりました。斯かよう様に孝心の深い長二でございますから、親の恩の有難いことは知つて居りますが、今度湯治場で始めて長左衛門夫婦は養い親であるということを知つたばかりでなく、実まことの親達の無慈悲を聞きましたから、殊ことさら更に養い親の恩が有難くなりましたが、両親とも歿ない後は致し方がございせんから、切せめては懇ねんごろに供養でもして恩を返そうと思ひまして、両親の墓のある谷中三崎さんざきの天童院てんりゅういんへまいり、和尚に特別の回向を頼み、供養のために丹誠をこらして経きやう机づくえ磐きん台だいなど造つて、本堂に納め、両親の命日には、雨風を厭いとわず必ず墓まいりをいたしました。

斯様な次第でございますから、何となく気分が勝れませぬので、諸方から種々注文があまりましても身にしてみても仕事を致さず、其の年も暮れて文政四巳年と相成り、正月二月と過ぎて三月の十七日は母親の十三年忌に当りますから、天竜院に於て立派に法事を営み、親方の養子夫婦は勿論兄弟弟子一同を天竜院へ招待して齋を饗い、万事滞りなく相済みまして、呼ばれて来た人々は残らず帰りましたから、長二は跡に残つて和尚に厚く礼を述べて帰ろうといたすを、和尚が引留めて、自分の室に通して茶などを侑めながら、長二が仏事に心を用いるは至極奇特な事ではあるが、去年の暮頃から俄かに仏三昧を初め、殊に今日の法事は職人の身分には過ぎて居るほど立派に営みしなど、近頃合点のいかぬ事種々あるが是には何か仔細のある事ならん、次第によつては別に供養の仕方もあるれば、苦しからずば仔細を話されよと懇に申されますゆえ、長二も予て機もあらば和尚にだけは身の上の一伍一什を打明けようと思つて居りました所でございますから、幸いのことと、自分は斯々の棄児にて、長左衛門夫婦に救われて養育を受けし本末を委しく話して居りますところへ、小坊主が案内して通しました男は、年の頃五十一二で、色の白い鼻準の高い、眼の力んだ丸顔で、中肉中背、衣服は糸織藍万の袷に、琉球紬の下着

を袷重ねにして、茶献上の帯で、小紋の紹ろの一重羽織を着て、珊瑚さんごの六分珠ろくぶだまの緒締おしめに、金無垢まへがなの前まへ金物を打った金革の煙草入は長門の筒つゝ差さしという、賤いやしからぬ拵おしめえですから、長二は遠慮して片隅の方に扣ひかえて居おると、其の男は和尚じやうに雑ざつと挨拶して布施を納め、一二服煙草を呑んで本堂へお詣まいりに行きました。其の容よう体たいが頗すこぶる大柄おおへいですから、長二は此こ様な人に話でもしかけられては面倒だ、此の間に帰ろうと思ひまして暇いとま乞こいを致しますと、和尚は又其の人に長二を紹ひきあわ介でいりばして出入場でいりばにしてやろうとの親切心がありますから、和「まア少しお待ちなさい、今のお方は浅草鳥越とりこえの龜甲屋幸兵衛様きつこうやこうべえというて私わしの檀家だんかじゃ、なか／＼の御身代ごみしろで、苦勞人の上に万事贅沢ぜいさくにして居られるから、お近附きんぷになつて置くが好えい」

長「へい有難うございますが、少し急ぎの仕事が」

和「今日は最もう仕事は出来はすまい、ム、仕事と云えば私わしも一つ煙草盆こきを拵おしめえてもらいたい、何ういうのが宜えいかな……これは前せん住じゆうが持つて居つたのじゃが、暴あつうしたと見えて此こ様に毀こわれて役にたゝんが、落板おとしはまだ使える、此の落板おとしに合あわして好えい塩梅しんばいに拵おしめえてもらいたいもんじゃ」

と種々話をしかけますから長二は帰ることが出来ません、其の内に幸兵衛は参詣さんぎをしま

い戻つて来て、

幸「毎月墓はかまいり参まゐをいたしたいと思ひますが、屋敷家業というものは体が自由になりませんので、つい不信心ふしんになります」

和「お忙しいお勤めではなか／＼寺詣りをなさるお暇はないで、暇のある人でも仏様からは催促こが来んによつて無沙汰勝かになるもので」

幸「まア左様さよういう塩梅しほばで……二月ふたつきばかり参詣まゐをいたさんうちに御本堂ごほんだうが大層おほいお立派りつぱになりました、彼の左ひだりの方かたにある経机きやうきは何方なんぽうからの御寄附ごよひづけでございませうか、彼様あんなな上じやう作さくは是まで見ません、余よつほど良い職人しやくじんが拵こしらえた物ものと見えます」

和「あの机きかな、あれは此処こゝにござる此この方かたの御寄附ごよひづけじやて」

幸「へい左様さようですか……これは貴方あなた御免ごめんなさい……へい初めてお目めにかゝります、私わたくしは幸兵衛さいべゑと申まをす者もので……只今承うけたまわれば彼の経机きやうきを御寄附ごよひづけになつたと申まをすことですが、あれは何処どこの何なんと申まをす者ものへお誂あつちえになつたものでございませう」

長「へい、あれは、へい私わつちが拵こしらえたので、仕事の隙すきに剩あまりつき木きで拵こしらえたのですから思おもうように出来できていません」

幸「へえーそれでは貴方あなたは指物さしものをなさるので」

和「はて、これが指物師で名高い不器用イ、ヤナ二長二さんという人さ」

幸「フム、それでは予て風聞に聞いた名人の木具屋さん……へえー貴方が其の親方でございますか、慥か本所のメ切とかにお住いですな」

長「左様です」

幸「それでは柳島の私の別荘からは近い……就てはお目にかゝったのを幸い、差向き客火鉢を二十に煙草盆を五六対拵えてもらいたいのですが、尤も桐でも桑でもかまいません、何時頃までに出来ませぬ」

長「早くは出来ません、良く拵えるのには木の十年も乾した筋の良いのを捜さなければいけませんから」

幸「どうか願います、お近いから近日柳島の宅へ一度来てください、漸々此間普請が出来上ったばかりだから、種々誂えたいものがあります」

長「へい、私はどうも独身で忙しないから、屹度上るといってお約束は出来ませぬ」

幸「そういう事なら近日私がお宅へ出ましよう」

長「どうか左様願います」

と長二は斯様な人と応対をするのが嫌いでございますから、話の途切れたのを機に暇

乞ごいをして帰りました。

十二

後あとで幸兵衛は和尚に、

幸「伎倆うでの良い職人というものは、お世辞も軽薄もないものだと聞いていましたが、成程彼の長二も其の質たちで、なか／＼面白い人物のようです」

和「職人じやによつて礼儀には疎うといが、心がけの善えい人で、第一陰徳いんとくを施す事が好きで、此の頃は又仏のことに骨を折っているじやて、余程妙きよくな奇特きせきな人じやによつて、どうか鼻肩はなかたにしてやつてください」

幸「左様さようですか、職人には珍らしい変り者でございしますが、それには何か訳のある事でしよう」

和「はい、お察しの通り訳のあることで、全体あの男は棄児しきでな、今に其の時の疵きずが背中に穴あなになつて残つて居おるげな」

幸「へえー、それは何うした疵きずで、どういふ訳でございしますか」

と幸兵衛が推して尋ねますから、和尚は長二の身の上を委しく話したならば、不憫が増して一層鼻屑いちぶしじゆうにしてくれるであろうとの親切から、先刻長二に聞きました一伍一仕のこ
とを話しますと、幸兵衛は大きに驚いた様子で、左様に不仕合な男なれば一層目をかけて
やろうと申して立帰りました後は、度々長二の宅を尋ねて種々の品を注文いたし、多分
の手間料を払いますので、長二は他の仕事を断つて、兼松を相手に龜甲屋の仕事ばかりを
しても手廻らぬほど忙しい事でございました。其の年の四月から五月まで深川に成田の不
動尊のお開帳があつて、大層賑いました。其のお開帳へ参詣した帰りがけて、四月の廿八
日の夕方龜甲屋幸兵衛は女房のお柳りゆうを連れ、供の男に折詰の料理を提さげさせて、長二の宅
へ立寄りました。

幸「親方宅うちかえ」

兼「こりやアいらつしやい……兄い……鳥越の旦那が」

長「そうか、イヤこれは、まアお上あがんなさい、相変らず散かっています」

幸「今日はお開帳へまいつて、人込で逆上のほせたから平清ひらせいで支度をして、帰りがけだが、
今夜は柳島へ泊るつもりで、近所を通る序ついでに、妻これが親方に近付になりたいと云うから、お
邪魔に寄つたのだ」

長「そりやア好く……まア此方へお上んなさい」

と六畳ばかりの奥の室の長火鉢の側へ寢蓆を敷いて夫婦を坐らせ、番茶を注いで出す長二の顔をお柳が見ておりましたが、何ういたしたのか俄に顔が蒼くなつて、眼が逆つり、肩で息をする変な様子でありますから、長二も挨拶をせずに見ておりますと、まるで氣違ひのように台所の方から座敷の隅々をきよろしく見廻して、幸兵衛が何を云つても、只はいとかいゝえとか小声に答えるばかりで、其の内に又何か思い出しでもしたのか、襟の中へ顔を入れて深く物を案じるような塩梅で、紙入を出して薬を服みますから、兼松が茶碗に水を注いで出すと、一口飲んで、

柳「はい、もう宜しゅうございます」

長「何つか御気分でも悪いのですか」

幸「なに、人込へ出ると毎でも血の道が癩つて困るのさ」

兼「矢張逆上せるので、もつと水を上げましょうか」

幸「もう治りました、早く帰つて休んだ方が宜しい……これは親方生憎な事で、ただ御厄介になりました、又其の内にしましよう」

とそこへ帰つてまいります。

お柳の装なりは南部の藍の子持縞こもちしまの袷あじに黒の唐繻子とうじゆすの帯に、極微塵ごくみじんの小紋縮緬こもんちりめんの三紋つもんの羽織うわぎを着て、水の滴たれるような鼈べつこう甲くわがの櫛笄くしびんがをさして居ります。年は四十の上を余程越して、末枯すがれては見えますが、色ある花は匂失においせずで、何処いけなりやらに水気があつて、若い時どは何様な美人どであつたかと思う程でございしますが、来ると突然いきなり病氣ひとことで一言も物を云わずに帰かへつて行く後うしろかげ影かげを兼松かねまつが見送りまして、

兼「兄い……ちつと婆おばさんだが好いい女おんなだなア」

長「そうだ、装なりも立派りつぱだのう」

兼「だが、旨味あじの無なえ顔かほだ、笑わらいもしねいで」

長「塩梅あんべえがわるかつたのだから仕方がねえ」

兼「左様さようだろうけれども、一体いったいが桐とうの糸いと柱たまという顔立かほだてだ、綺麗きれいばかりで面白味おもしろみが無なえ、旦那だんなの方は立派りつぱで気が利きいてるから、桑くわの白質しろたまじりというのだ」

長「巧うまく見立みだててたなア」

兼「兄いも己が見立てた」

長「何と」

兼「兄いは杉の粗理だなア」

長「何故」

兼「何故って厭味なしでさっぱりしていて、長く付合うほど好くなるからさ」

長「そんなら兼、手前は檜の生節かな」

兼「有難え、幅があつて匂いが好いというのか」

長「いゝや、時々ポンと抜けることがあるというのよ」

兼「人を馬鹿にするなア、毎でもしめえにア其様な事だ、おやア折を置いて行つたぜ、

平清のお土産とは気が利いてる、一杯飲めるぜ」

長「馬鹿アいうなよ、忘れて行つたのなら届けなけりやアわりいよ」

兼「なに忘れてツたのじやア無え、コウ見ねえ、魚肉の入つてる折にわぎく熨斗が

挿んであるから、進上というのに違いねえ、独身もので不自由というところを察して持つ

て来たんだ、行届いた旦那だ……何が入つてるか」

長「コウよしねえ、取りに来ると困るからよ」

兼「心配しなさんな、そんな吝な旦那じゃア無え、もしか取りに来たら己が喰つちま
ったというから兄いも喰いねえ、一合買つて来るから」

と、兼松は是より酒を買つて来て、折詰の料理を下物に満腹して寝てしまいました。其
の翌朝長二は何か相談事があつて大徳院前の清兵衛親方のところへ参りました後で兼松
が台所を片付けながら、空の折を見て、長二の云う通り忘れて行ったので、柳島から取り
に来はしまいかと少し気になるところへ、毎度使いに来る龜甲屋の手代が表口から、

手代「はい御免なさい、柳島からまいりました」
と聞いて兼松はぎよつとしました。

十四

兼松は遁げる訳にも参りませんから、まご／＼しながら、

兼「えい何か御用で」

手「はい、御新造様が此のお手紙をお見せ申して、昨日忘れた物を取って来てくれろと
仰しゃいました」

兼「へえー忘れた物を、へえー」

手「それに此の品を上げて来いと仰しやいました」

と手紙と包つみもの物を出しましたが、兼松は蒼くなつて、遠くの方から、

兼「何なんだか分りやせんが、生憎あにき兄え、長二が留守ですから、手紙も皆みんなな置いてつておくんせえ」

手「いゝえ、是非手紙をお目にかけると申付けられましたから、お前さん開けて見ておくんさい」

兼「だつて私わっちにはむずかしい手紙は読めねえからね」

手「御新造様のは毎いっでも仮名ばかりですが」

兼「そうかね」

と怖々手紙ひらを開いて、

兼「えゝと何なんだナ……鳥渡とりなべちゆうじよう申上々……はてな鳥なべになりそうな種はなかつた

が、えゝと……昨日さくひはよき折……さア困つた、もしお使い、実はねかんなくず 匏か 屑くずの中にあつたからお土産だと思つてね、お手紙の通り好い折でしたが、つい喰つたので」

手「へえー左様さようでございますか、私わたくしは火鉢の側のように承うりましたが」

兼「何処でも同じ事だが、それから何だ、えゝ……よき折から……空になった事を知つてるのか知らん、御めもし致……何という字だろう……御うれしく……はてな、御めしがうれしいとは何ういう訳だろう、それから……そんじ上……※……サア此の瘦のような字は何とか云つたツけねえお前さん、此の字は何と云いましたツけ」

手「へい、どれでございます、へい、それはまいらせそろという字で」

兼「そうく、まいらせそろだ、それにしても何が損じたのか訳が分らねえが、えゝと……その折は、また折の事だ喰わなければよかつた……持びようおこり……おごりには違えぬいが、持びようとは何の事だか……あつく御せわに……相成り……御きもじさまにそんじ※……又損じて瘦のような字があるぜ、相摸の相という字に 楠 正 成の成という字だが、相成じやア分らねえし、又きもじさまとア誰の名だか、それから、えゝと……あしからかすく御かんにん被下度候……何だか読めねえ」

手「お早く願います」

兼「左様急いちやア尚分らなくなつたら、此のからすくかんぎえもんとア此間御新造が来た夕方の事でしょう」

手「そんな事が書いてございますか」

兼「あるから御覧なせえ、それ」

手「こりやアあしからずく御かんにくくだされたくそろでございます」

兼「フム、お前さんの方がなかく旨い物だ、其の先にむずかしい字が沢山書いてあるが、お前さん読んでごらんなせい」

手「こゝでございますか」

兼「何でも其の見当だツた」

手「こゝは……其の節置わすれ候懷中物此のものへ御渡し被下度候、此の品粗まつなれどさし上候先は用事のみあらく※」

兼「旨い其の通りだ、その結尾にある釣鉤のような字は何とか云つたね」

手「かしくと読むのでございます」

兼「ウムそうだ、分つた事ア分つたが、兄いがいねえから、帰つて其の訳を御新造に云つておくんなせい」

と申しますので、手代も困つて帰りました。其の後へ長二が戻つて来ましたから、兼松が心配しながら手紙を見せると、

長「昨日御新造が葉を出したまんま紙入を忘れて行つたのを、今朝見つけたから取りに

来ないうちにと申つて、親方の所へ行つた歸りがけに柳島へ廻つて届けに行つたら、先刻取りにやつたと云つたが、また此様な土産物をよこしたのか、気の毒な、何だ橋本の料理か、兼又一杯飲めるぜ」

兼「ありがてえ、毎日斯ういう塩梅に貰え物があると世話が無えが、昨日のは喰いながら心配だツた」

長「何も其様な思ひをして喰うにア及ばない、全体手前は意地がきたねえ、衣食住と云つてな着物と食物と家の三つア身分相応というものがあると、天竜院の方丈様が云つた、職人ふぜいで毎日店屋の料理なんぞを喰つちア罰があたるア、貰つた物にしる毎日こんな物を喰つちア口が驕つて来て、まずい物が喰えなくなるから、実ア有がた迷惑だ、職人でも芸人でも金持に鼻屑にされるア宜いが、見よう見真似で万事贅沢になつて、氣位まで金持を氣取つて、他の者を見くびるようになるから、己ア金持と交際うことア大嫌いだ、龜甲屋の旦那が来い〜というが、今まで一度も行かなかつたが、忘れて行つたものを黙つて置いちやア氣が済まねえから、持つて云つて投げ込んで来たが、柳島の宅ア素的に立派なもんだ、屋敷稼業というものア、泥坊のような商売と見える、そんな人のくれたものア喰つても旨くねえ、手前喰うなら皆な喰いねえ、己ア天麩羅でも買つて喰うから」

と雇いの婆さんに天麩羅を買わせて茶漬を喰いますから、兼松も快よく其の料理を喰うことは出来ません。婆さんと二人で少しばかり喰つて、残りを近所に住んでいる貧乏な病人に施すという塩梅で、万事並の職人とは心こゝろ立たが異ちがつて居ります。

十五

長二は母の年ねん回かいの法事に、天竜院で龜甲屋幸兵衛に面会してから、格外の鼻肩を受け
ていろいろ注文物があつて、多分の手間料を貰いますから、活くわ計けい向むきも豊になりましたの
で、予かねての心願どおり、思うまゝに貧窮人に施す事が出来るようになりましたのは、全く
両親が草葉の蔭から助けてくれるのであろうと、益々両親の菩提《ぼだい》を弔うにつき
ましては、愈々いよくまこと実の両親の無慈悲を恨み、寐ても覚めても養い親の大恩と、実の親の不
実を思わぬ時はございません。さて其の夏も過ぎ秋も末になりまして、龜甲屋から柳島の
別荘の新座敷の地袋に合わして、唐木からぎの書棚を拵えてくれとの注文がありました。前にも
申しました通り、長二はお柳が置忘れた紙入を届けに行つたきり、是まで一度も龜甲屋へ
参つた事はございませんが、今度の注文物は其の地袋の摸も様ようを見なければ寸法其の外ぐの工

合あひが分りませんので、余儀なく九月廿八日に自身で柳島へ出かけますと、折よく幸兵衛が来ておりまして、お柳と共に大喜びで、長二を座敷へ通しました。長二は地袋の模様を見て直すぐに帰るつもりでしたが、夫婦が種々いろくの話を仕かけますので、迷惑ながら尻を落付けて挨拶をして居るうちに、橋本の料理が出ました。

幸「親方……何にもないが、初めてだから一杯やつておくれ」

長「こりやアお気の毒さまな、私わたくしア酒は嫌いですから」

柳「それでもあろうが、私がお酌をするから」

長「へい〜これは誠にどうも」

幸「酒は嫌いだというから無理に侷すくめなさんな、親方肴でもたべておくれ」

長「へい、こんな結構な物ア喰った事アございませんから」

幸「だツて親方のような伎倆うでまえで、親方のように稼いでは随分儲かるだろうから、旨い物には飽きて居なさろう」

長「どう致しまして、儲かるわけにはいきません、皆みんなな手間のかゝる仕事ですから、高い手間を戴きましても、一日いちんちに割ってみると何程にもなりやしませんから、なか〜旨い物なんぞ喰う事ア出来ません」

幸「左様じやアあるまい、人の噂に親方は貧乏人に施しをするのが好きだという事だから、それで銭が持てないのだろう、何ういう心願かア知らないが、若いにしちア感心だ」

長「人は何てえか知りませんが、施しといやア大業おおぎょうです、私わたくしア少さい時分貧乏でしたから、貧乏人を見ると昔を思い出して、気の毒になるので、持合せの銭をやった事がございますから、そんな事を云うんでしよう」

柳「長さん、お前ちい少さい時貧乏だツたとお云いだが、お父とつさんやお母つかさんは何商売だったね」

長「元は田舎の百姓で私わたくしの少さい時江戸へ出て来て、荒物屋を始めると火事で焼けて、間もなく親父が死んだものですから、母親おふくろが貧乏の中で私を育ったので、三度の飯さえ碌に喰わない程でしたから、子供心に早く母親の手助けをしようと思つて、十歳とおの時清兵衛親方の弟子になったのですが、母親も私が十七の時死んでしまったのです」

と涙ぐんで話しますから、幸兵衛夫婦も其の孝心の厚いのに感じた様子で、

柳「お前さんのような心がけの良い方が、何うしてまア其様そんなに不仕合ふしあわせだろう、お母さんをもう少し生かして置きたかつたねえ」

長「へい、もう五年生きていてくれると、育つてくれた恩返おんげえしも出来たんですが、まゝ

にならないもんです」

と鼻をすゝつて握拳にぎりこぶしで涙を拭きます心を察してか、お柳も涙ぐみまして、

柳「お察し申します、お前さんのように親思いではお父さんやお母さんに早く別れて、孝行の出来なかつたのはさぞ残念でございましょう」

長「へい左様です、世間で生の親うみより養い親の恩は重いと云いますから、猶残念です」

柳「へえー、そんならお前さんの親御は本当の親御さんではないの」

と問われたので、長二はとんだ事を云つたと気がつきましたが、今さら取返しがつきませんから。

長「へい左様さよう……私わたくしの親は……へい本当の親ではございません、私を助けて、いゝえ私を養つてくれた親でございます」

幸「はて、それでは親方は養子に貰われて来たので、本当の親御達はまだ達者かね」

長「其様そのんな訳じゃアございせんから」

幸「そんなら里つ子ながれとでもいうのかね」

長「いゝえ、左様さようでもございせん」

幸「どうしたのか訳が分らない」

長「へい、此の事は是まで他に云つた事アございせんから、どうもへい私の恥ですから誠に」

柳「親方何だね、お前さんの心掛が宜いというので、旦那が此様に可愛がつて、お前さんの為になるように心配してくださるのだから、話したつて宜いじゃアないかね」

幸「どんな事か知らないが、次第によつちやア及ばずながら力にもなろうから、話して聞かしのさい、決して他言はしないから」

長「へい、そう御親切に仰しやつてくださるならお話をいたしましょうが、何卒内々に願います………実ア私ア棄児です」

柳「お前さんがエ」

長「へい、私の実の親ほど」

と云いかけて実親の無慈悲を思うも臟腑が沸かえるほど忌々しく恨めしいので、唇が痙攣り、烟管を持った手がぶる／＼顫えますから、お柳は心配気に長二の顔を見詰めました。

柳「本当の親御達が何うしたのだえ」

長「へい私の実の親達ほど酷い奴は凡そ世界にございませぬえ」

其の時の男というは此の幸兵衛か、但しは幸兵衛は正しい旦那で、奸夫は他の者であったか、其の辺の疑いもありますから、篤と探索した上で仕様があると思いかえして、何気なく肌を入れまして、

長「こりやとんだ詰らないお話をいたしましたして、まことに失礼を……急ぎの仕事もございませんからお暇にいたします」

幸「まあ宜いじゃアないか、種々聞きたい事もあるから、今夜泊ってはどうかだえ」

長「へい、有難うございますが、兼松が一人で待ってますから」

柳「親方御免よ、生憎また持病が発つて」

長「お大事になさいますし……左様なら」

と急いで宅へ帰りましたが、考えれば考えるほど、幸兵衛夫婦が実の親のようでありますから、それから段々二人の素性を探索いたしますと、お柳は根岸辺に住居していた物持某の妻で、某が病死したについて有金を高利に貸付け、孀暮して幸兵衛を手代に使っているうち、何時か夫婦となり、四五年前に浅草鳥越へ引移つて来たとも云い、又先の亭主の存生中から幸兵衛と密通していたので、亭主が死んだのを幸い夫婦になった

のだとも云つて、判然はつきりはしません、谷中の天竜院の和尚の話に、何故なにゆゑか幸兵衛が度々たび／＼来て、長二の身の上は勿論ふたおや両親の素性などを根強く尋ねるので、彼是を思い合すと、幸兵衛夫婦は全く親には違いないが、無慈悲の廉かじがあるので、面目なくつて今さら名告なのすることも出来ないから、鼻肩こつちというを名にして仕事を云付け、屢々しば／＼往来ゆきして親しく出入でいりをさせようとしたが、此方こつちで親しまないので余計な手間料を払ったり、不要な道具を注文したりして恩を被きせ、余所よそながら昔の罪を償おうとの了簡であるに相違ないが、前非ぜんびを後悔したなら有体ありていに打明けて、親子の名告なのりをすればまだしも殊勝だのに、そうはしないで、現在実子と知りながら旧悪を隠して、人を懐なすけようとする心底は面白くないから、今度来たなら此方から名告りかけて白状させてやろうと待もつけて居おるとは知らず、幸兵衛は女房お柳いすと何れかへ遊山にまいった帰りがけと見えて、供も連れず、十一月九日の夕方長二の宅うちへ立寄りしました。丁度兼松は深川六間堀に居おる伯母の病氣見舞に行き、雇婆さんは自分の用達ようたしに出て居りませんから、長二は幸兵衛夫婦を表に立たせて置いて、其の辺に取散してあるものを片付け、急いで行灯あんどうを点ともして夫婦を通しました。

幸「夕方だが、丁度前を通るから尋ねたのだ、もう構いなさんな」

長「へい、誠にお久しぶりで、なに今皆みんなな他へまいって一人ですから、誠にどうも」

と番茶を注いで出しながら、

長「いつぞやは種々御馳走を戴きまして、それから此来体が悪いので、碌に仕事をいたしませんから、柵も木取ったばかりで未だ掛りません」

幸「今日は其の催促じやアないよ、彼の時ぎりでお目にかゝらないから、妻が心配して」とお柳の顔を見ると、お柳は長二の顔を見まして、

柳「いつぞやは生憎持病が発つて失礼をしましたから、今日はそのお詫かた／＼」

長「それは誠にどうも」

と挨拶をしながら立つて、戸柵の中を引掻きまわして、漸々菓子皿を探して、有合せの最中を五つばかり盛つて出し、

長「生憎兼松も婆さんも留守で、誠にどうも」

柳「お一人ではさぞ御不自由でしょう」

長「へい、別に不自由とも思いませんが、此様な時何が何処に蔵つて在るか分りませんので」

柳「左様でしょう、それに病み煩いの時などは内儀さんがないと困りますから、早くお貰いなすつては何うです、ねえ旦那」

幸「左様だ、失礼な云分だが、鰥夫に何とやらで万事所帯に損があるから、好いのを見付けて持ちなさい」

長「だつて私のような貧乏人の処えは来人がございませぬ、来てくれるような奴は碌なのではございませぬから」

柳「なアに左様したもんじゃアない、縁というものは不思議なもんですよ、恥を云わないと分りませんが、私は若い時伯母に勧められて或所へ嫁に行つて、さん／＼苦勞をしたが、縁のないのが私の幸福で、今は斯ういう安樂な身の上になつて、何一つ不足はないが子供の無いのが玉に瑕とでも申しましようか、順当なら長さん、お前さんぐらいの子があつても宜いんですが、子の出来ないのは何かの罰でしようよ、いくらお金があつても子の無いほど心細いことはありませんから、長さん、お前さんも早く内儀さんを貰つて早く子をお拵えなさい……お前さん貧乏だから嫁に來人がないとお云いだが、お金は何うにでもなりますから早くお貰いなさい、まだ宅の道具を種々拵えてもらわなければなりませんから、お金は私が御用達てます」

と云いながら膝の側に置いてある袱紗包の中から、其の頃新吹の二分金の二十五兩包を二つ取出し、菓子盆に載せ、折熨斗を添えて、

柳「これは少いが、内儀さんを貰うにはもう些と広い好い家へ引越さなけりやアいけな
いから、納つてお置きなさい、内儀さんが決つたなら、又要るだけ上げますから」

と長二の前へ差出しました。長二は疾くに幸兵衛夫婦を実の親と見抜いて居りますところへ、最前からの様子といい、段々の口上は尋常の鼻肩でいふのではなく、殊に格外の大金に熨斗を付けてくれるというは、己を確かに実子と認めたからの事に相違ないに、飽までも打明けて名告らぬ了簡が恨めしいと、むか／＼と腹が立ちましたから、金の包を向うへ反飛ばして容を改め、両手を膝へ突きお柳の顔をじつと見詰めました。

十七

長「何です此様な物を……あなたはお母さんでしよう」

と云われてお柳はあつと驚き、忽ちに色蒼ざめてふる／＼顫えながら、透巡して幸兵衛の背後へ身を潜めようとする。幸兵衛も血相を変え、少し声を角立てまして、

幸「何だと長二……手前何をいうのだ、失礼も事によるア、気でも違つたか、馬鹿々々
し」

長「いゝえ決して気は違ちがえませんが……成程隠かくしているのに私が斯あう云いつちア失礼かア知りませんが、棄子の廉かどがあるから何時まで経つても云わないのでしよう、打明けたつて私が親の悪事を誰に云いましょう、隠かくさず名告なこつておくんなせえ」

と眼を見張つて居ります。幸兵衛は返答に困りまして、うろくするうち、お柳は表の細工場さいくばの方へ遁にげて行きますから、長二が立つて行つて、

長「お母さん、まアお待ちなせえ」

と引戻すを幸兵衛が支えて、

幸「長二……手前何をするのだ、失礼千萬な、何を証拠そんに其様なことをいうのだ、ハ、ア分つた、手前は己が鼻根てめえにするに附込んで、言いがりをいうのだな、お邸方やしきがたの御用達ようたしをする龜甲屋幸兵衛だ、失礼なことをいうと召連訴めしつれうたえをするぞ」

柳「あれまア大きな声をおしでないよ、人が聞くと悪いから」

幸「誰が聞いたつて構うものか、太い奴だ」

長「何で私が言いがりなんぞを致わしましょう、本当の親だと明しておくんなさりやアそれで宜いいんです、それを縁に金を貰おうの、お前めえさんの家うちに厄介やっけいになろうのとは申しませんが、私は是まで通り指物屋でお出入を致しますから、只親だと一言ひとこと云つておくん

せえ」

と袂すがたに縫ぬるを振払い、

幸「何をするんだ、放さねえと家いえぬし主へ届けるが宜いか」

と云われて長二が少し怯ひるむを、得たりと、お柳を表へ連れ出そうとするを、長二が引留めようと前へ進む胸あたりの辺あたりを右の手で力にまかせ突倒して、

幸「さア疾はやく」

とお柳の手を引き、見返りもせず柳島の方かたへ急いでまいります。後うしろ影かげを起上りなが

ら、長二が恨めしそうに見送つて居りましたが、思わず跣はだし足で表へ駈出し、十間ばかり追

掛つかけて立止り、向うを見詰めて、何か考えながら後あと歩しきりして元の上あがり口はなに戻り、ドツサ

り腰をかけて溜息を吐つき、

長「ハア―廿九年めえ前に己を藪なけ中へ棄てた無慈悲な親だが、会つて見ると懐かしいから、名告つてもらえてえと思つたに、まだ邪慳を通して、人の事を氣違だの騙かたりだのと云つて明かしてくれねえのは何処までも己を棄てる了簡か、それとも己の思違いで本当の親じやア無いのか知らん、いゝや左様そうで無ねえ、本当の親で無ねくつて彼様あんななことをいう筈ねは無ねい、それに五十両という金を……おゝ左様だ、彼あの金は何うしたか」

と内に這入つて見ると、行灯あんどうの側に最後の金包がありますから、

長「やア置いて行つた：此の金を貰つちやア済まねえ、チョツ忌々いまくしい奴だ」

と独言ひとりごとを云いながら金包を手拭てぬぐいに包んで腹掛のどんぶりに押し込み、腕組うでぐみをして、女

と一緒にだからまだ其様そのさまに遠くは行くまい、田圃たんぼ径から請地うけちの堤どてづた伝いに先へ出越せば逢

えるだろう、柳島まで行くには及ばねえと点頭うなずきながら、尻しりをはしよつて麻裏草履つづを突か

け、幸兵衛夫婦の跡を追つて押上おしあげの方かたへ駈出しました。此方こちらは幸兵衛夫婦丁度霜月九日

の晩で、宵よから陰くもる雪催こもしに、正北風またらいの強い請地うけちの堤どてを、男は山岡頭巾やまおかづつみをかぶり、女はお

高祖頭巾こうそづきんに顔を包んで柳島へ帰る途中、左右を見返り、小声で、

幸「此方こちらの事を知らせずとも、余所ながら彼あれを取立て、やる思案もあるから、決して気け

ぶりにも出すまいぞと、あれ程云つて置いたに、余計なことを云うばかりか、己にも云わ

ずに彼様あんな金を遣つたから覺さとられたのだ、困るじやアねえか」

柳「だつてお前さん、現在我子と知れたのに打棄うちちやつて置くことは出来ませんから、名告

らないまでも彼を棄てた罪滅つみほろぼしに、彼のあのくらの事はしてやらなければ今日様こんにちさまへ済

みません」

幸「エ、まだ其様そのさまなことを云つてるか、過去すげきつた昔の事は仕方がねえ」

柳「まだお前さんは彼を先の旦那の子だと思つて邪慳になさるのでございますね」

幸「馬鹿を云え、そう思うくらいなら彼様に目をかけてやりはしない」

柳「だつて先刻なんぞア酷く突倒したじやアありませんか」

幸「それでも今彼に本当のことを知られちやア、それから種々な面倒が起るかも知れないから、何処までも他人で居て、子のようになしようと思ふからの事だ……おゝ寒い、斯様な所で云合つたつて仕方がない、速く歸つて緩くり相談をしよう、さア行こう」

と、お柳の手を取つて歩き出そうと致しまする路傍の枯蘆をガサ／＼と掻分けて、幸兵衛夫婦の前へ一人の男が突立ちました。是は申さないでも長二ということ、お察しでございましょう。

十八

請地の土手伝いに柳島へ帰ろうという途中、往來も途絶えて物淋しい所へ、大の男がいきなりヌツとあらわれましたので、幸兵衛はぎよつとして遁げようと思いましたが、女を連れて居りますから、度胸を据えてお柳を擁いながら、一足三足後退して、

幸「誰だ、何をするんだ」

長「誰でもございませせん長二です」

幸「ム、長二だ……長二、手前何しに来たんだ」

長「何しに来たとはお情ねえ……私は九月の廿八日、背中の傷を見せた時、棄てられたお母さんだと察したが、奉公人の前があるから黙って帰って、三月越しお前さん方の身上を聞糺して、確に相違無えと思うところへ、お二人で尋ねて来てくださったのは、

親子の名告をしてくんなさるのかと思つたら、そうで無えから我慢が出来ず、私の方から云出したのが気に触つたのか、但しは無慈悲を通す気か、氣違だの騙りだのと人に悪名を付けて帰って行くような酷い親達から、金なんて貰う因縁が無えから、先刻の五十両を返そうと捷徑をして此処に待受け、おもわず聞いた今の話、もう隠す事ア出来ねえだろう、お母さん、何うかお前さんに云い難い事があるかア知りませんが、決して他には云わねえから、お前を産んだお母だといつてくだせい……お願いです……また旦那は私の本当のお父さんか、それとも義理のお父さんか聞かしてくだせい」

と段々幸兵衛の傍へ進んで、袂に縋る手先を幸兵衛は振払いまして、

幸「何をしやアがる氣違奴……去年谷中の菩提所で初めて会つた指物屋、仕事が上手で

心がけが奇特きせきだといふので鼻肩きなにして、仕事をさせ、過分な手間料を払つてやれば附けあがり、途方もねえ言いが、りをして金にする了簡りょうかんだな、其様そのんな事に悸びくともする幸兵衛じゃア無ねえぞ……え、何をするんだ、放せ、袂たもとが切きるア、放さねえと打擲ぶんなぐるぞ」
と拳を振上げました。

長「打ぶつなら打ちなせえ、お前めえさんは本当の親じゃアねえか知らねえが、お母つかさんは本当のお母さんだ……お母さん、何故私わっちを湯河原へ棄てたんです」

とお柳の傍へ進もうとするを、幸兵衛が遮さえぎりながら、

幸「何をしやアがる」

と云いさま拳固で長二の横よこ面を殴りつけました。そうでなくツても憎い奴だと思つてゐる所でございますから、長二は赫かつと怒いかりまして、打つた幸兵衛の手を引ひとらえまして、

長「打ぶちやアがつたな」

幸「打たなくツて泥坊ぬまめ」

長「何だと、何時己ぬすが盗人ぬすをした」

幸「盗人だ、此こ様な事を云いかけて己の金を奪とろうとするのだ」

長「金が欲ほしくれえなら、此の金を持って来きやアしねえ、汝うぬのような義理も人情も知ら

ねえ畜生の持った、穢けがらわしい金は要いらねえ、返かえすから受取うけとっておけ」

と腹掛はらかけのかくしから五十両の金包ぶちきを取出し、幸兵衛きへいゑに投付なげつけけると額あたまに中あたりましたから堪たりません、金の角かどで額かぶが打切ぶちきれ、血ちが流れる痛いたさに、幸兵衛きへいゑは益々おこ怒こつて、突いきなり然なり長二ちやうじを衝倒つきたおして、土足つちあしで頭あたまを蹴けましたから、砂埃すなごが眼まなこに入いつて長二ちやうじは物ものを見る事ことが出来できません
が、余あまりの口惜くやしさに手探てあぐさりで幸兵衛きへいゑの足あしを引ひ捉とえて起上おこり、

長ちやう「汝うぬウ蹴けやアがツたな、此この義理ぎり知しらずめ、最もう合点がってんがならねえ」

と盲めくらなぐ擲なりりで拳固こぶしを振廻まわすを、幸兵衛きへいゑは右みぎに避よけ左ひだりに躲かわし、空くうを打うたして其そのの手てを捉とえ捻ねじ上あるを、そうはさせぬと長二ちやうじは左ひだりを働はたらかせて幸兵衛きへいゑの領えりくび頸くびを掴つかみ、引倒ひきたそうとする糞力くそぢからに幸兵衛きへいゑは敵かたいませんから、挿さして居ゐります 紙かみ入留いれどめの短刀たんたうを引抜ひいて切払きりおうとする白刃しらばが長二ちやうじの眼先ひらめへ閃ひらめいたから、長二ちやうじもぎよツとしましたが、敵手あいてが刃物やいばを持って居ゐるのを見ては油断あせが出来できませんから、幸兵衛きへいゑにひしと組付くみいて、両手りやうてを働はたらかせないように致いたしました。

長「その刃物は何だ、廿九年前に殺そうと思つて打棄つた己が生きて居ちやア都合が悪
いから、また殺そうとするのか、本当の親の為になる事なら命は惜まねえが、実子と知り
ながら名告もしねえ手前のてめえのような無慈悲な親は親じゃアねえから、命はやられねえ……危
ねえ」

と刃物をもぎと※取ろうとするを、渡すまいと揉合う危なさを見かねて、お柳は二人に怪我を
させまいと背後うしろへ廻つて、長二の領元えりもとを掴み引分けんとするを、長二はお柳も己を殺す
気か、よくも揃つた非道な奴らだと、かつと逆上のぼせて気も顛倒てんどう、一生懸命になつて幸兵
衛が逆手さかてに持つた刃物の柄つかに手をかけて、引奪ひったくろうとするを、幸兵衛が手前へ引く機はずみに
刀尖きつさき深く我と吾手わがてで胸先を刺貫さしつらぬき、アツと叫んで仰向けに倒れる途端に、刃物は長
二の手に残り、お柳に領を引かるゝまゝ将棋倒しにお柳と共に転んだのを、肩息ながら幸
兵衛は長二がお柳を組伏せて殺すのであろうと思ひましたから、這寄つて長二の足を引張
る、長二は起上りながら幸兵衛を蹴飛けりとばす、後からお柳が組付くを刃物で払う刀尖こびんが小鬢
を掠かすつたので、お柳は驚き悲しい声を振擻ふりしほつて、

柳「人殺しイ」

と遁出にげだすのを、もう是までと覚悟を決めて引戻す長二の手元へ、お柳は咬付かみつき、刃物を

奪ろうと揉合う中へ、跟きながら幸兵衛が割つて入るを、お柳が氣遣い、身を楯にかばいながら白刃の光をあちらこちらと避けましたが、とうとうお柳は乳の下を深く突かれて、アツという声に、手負ながら幸兵衛は、

幸「おのれ現在の母を殺したか」

と一生懸命に組付いて長二の鬢の毛を引摺りましたが、何を申すも急所の深手、諸行無常と告渡る浅草寺の鐘の音を冥府へ苞に敢なくも、其の儘息は絶えにけりと、芝居なれば義太夫にとつて語るところです。さて幸兵衛夫婦は遂に命を落しました。其の翌日、丁度十一月十日の事でございます。回向院前の指物師清兵衛方では急ぎの仕事があつて、養子の恒太郎が久次留吉などという三四名の職人を相手に、夜延仕事をしておる処へ、慌てゝ兼松が駈込んでまいりまして、

兼「親方は宅かえ」

恒「何だ、悔りした……兼か久しく来なかつたのう」

兼「長兄は来やしねえか」

恒「いゝや」

兼「はてな」

恒「何うしたんだ、何か用か」

兼「聞いておくんせえ、私がね、六間堀の伯母が塩梅がわりいので、昨日見舞に行つて泊つて、先刻帰つて見ると家が貸店になつてるのサ、訳が分らねえから大屋さんへ行つて聞いてみると、兄が今朝早く来て、急に遠方へ行くことが出来たからッて、店賃を払つて、家の道具や夜具蒲団は皆な兼松に遣つてくれると云置いて、何処かへ行つてしまつたのサ、全体何うしたんだろう」

二十

恒「そいつは大変だ、あの婆さんは何うした」

兼「婆さんも居ねえ」

久「それじゃア長兄と一緒に駈落をしたんだ、彼の婆さん、なか／＼色気があつたからなア」

恒「馬鹿アいうもんじゃアねえ……何か訳のあることだろうがナア兼……婆さんの宿へ行つて様子を聞いて見たか」

兼「聞きやアしねえが、隣の内儀おかみさんの話に、今朝婆さんが来て、親方が旅に出ると云つて暇をくれたから、田舎へ帰けえらなけりやアならねえと云つたそうだ」

恒「其様そんな事なら第一でえいちばんに此方こつちへいさだ」

兼「己も左様そうだと思つたから聞きに来たんだ、親方にも断らずに旅に出る筈アねえ」

留「女房の置去てめえという事アあるが、此奴こいつア妙だ、兼手前は長兄に嫌われて置去あに遭つたんだ、おかしいなア」

兼「冗談じやアねえ、若わえ親方の前めえだが長兄に限つちやア道楽で借金があるという訳じやアなし、此の節いア好い出入場が出来て、仕事が忙がしいので都合も好い訳だのに、夜遁よにげのような事をするがとア合点がいかねえ……兎も角も親方に会つて行こう」

と奥へ通りました。奥には今年六十七の親方清兵衛あんどんが、茶微塵ちやみじん松坂縞まつざかじまの広袖ひろそでに厚あ綿つわたの入つた八丈木綿の半纏はんまきを着て、目鏡めがねをかけ、行灯あんどんの前まへで其の頃鍛冶かじの名人めいじんと呼ばれたました神田の地藏橋くいにひろの國くに廣ひろの打つた鑿のみと、浅草田圃あさくさでんぼの吉廣よしひろ、深川の田安前たやすまえの政鍛冶まさかじの打つた二挺かんなの鉋とぎあの研上げたのを検みて居ります。年のせいで少し耳は遠くなりましたが、気性の勝つた威勢いせのいゝ爺おやさんでございませす。兼松は長二の出しゅつぽん奔ひとを甚く案じて、気が急せぎますから、奥の障子いきなりを明けて突然いきなりに、

兼「親方大變です、何うしたもんでしよう」

清「え、何だ、仰山な、静かにしろえ」

兼「だつて親方私の居ねい留守に脱出しちまつたんです」

清「それ見ろ、彼様にいうのに打様を覚えねえからだ、中の釘は真直に打つても、

上の釘一本をありに打ちせえすりやア留の離れる氣遣えは無ねいというのだ……杉の堅木かたぎか」

兼「まあ堅気かたぎだ、道楽をしねえから」

清「大きいもんか」

兼「私わっちより少し大きい、たしか今年廿九だから」

清「何を云うのかさっぱり分らねえ、己おらア道具の事を聞くのだ」

兼「ム、道具ですか道具は悉すつかりやぐ、皆家具蒲団まで私わっちにくれて行つたんです」

清「まだ分らねえ……棚か箱か」

兼「へい、店たなは貸店になつちまつたんです」

清「何だと菓子棚だ、ウム菓子箆笥のことか、それが何うしたんだと」

兼「何うしたんか訳が分らねえから聞きに来たんだが、親方へ談はなしなしだとねえ」

清「そりやア長二が為する事だものを、一々己おれに相談する事アねえ」

兼「だツて、それじゃア済まねえ、己おらア其その様な人とア思わなかつた……情なさけねえ人だなア」
 清「手てめえ前何か其の仕事の事で長二と喧嘩けんかでもしたのか」

兼「いゝえ、長ながえ間助ますけに行つてるが、喧嘩けんかどころか大きい声をして呼んだ事もねえ……己おれを可愛おれがって、近所おれの人が本当の兄きょうでえ弟あでも彼あアは出来ねえと感心あしているくれえだのに、己おれが六間堀むくぼりへ行つてる留守留守に黙もくつて脱出ぬけだしたんだから、不思議ふしぎでならねえ」

清「何も不思議ふしぎアねえ、手てめえ前の技うでが鈍ぬいから脱出ぬけだしたんだ、長二は手てめえ前に何も云わねいのか」

兼「何とも云いませんで」

清「はてな、彼あんな様に親切あんなな長二が教えねえ事ことアねえ筈はずだが……何か仔細しせいのある事だ」
 と腕組うでぐみをして暫しばらくらく思案しあんをいたし、

清「些すこし心当こころあたりがあるから明日あしたでも己おれが尋ねてみよう」

兼「左様そうです、何か深なんいわけがあるんです、心当こころあたりがあるんなら何も年寄としよの親方おやぢが行くにやア及びおよびません、私わっちが尋ねましよう」

清「手てめえ前ちよつとじゃア分わらねえ、己おれが聞いてみるから手てめえ前ちよつと今夜けえ帰かえつたら、長二に明日あす仕事すきの隙すきを見て一寸ちよつと来こてくれると云いつてくんない」

兼「親方を云うんです、家に居もしねえ長兄に来てくれろとア」

清「何処へ行つたんだ」

兼「何処かへ身を隠したから心配しているんだ」

清「何だと、長二が身を隠したと、え、そんなら何故速くそう云わねえんだ」

兼「先刻から云つてるんです」

清「先刻からの話ア釘の話じやアねえか」

兼「道理で訝しいと思つた……困るな、つんぼ……エ、ナニあの遠方へ急に旅立をす
ると、家主の所え云置いて、何処へも沙汰なしに居なくなつちまつたんです」

清「急に旅立をしたと、それにしても己の所え何とか云いそうなもんだ、黙つて行く所
をもつて見りやア、何か済まねえ事でもしたんだろうが、彼奴に限つちやア其様な事アあ
るめいに」

と子供の時から丹誠をして教えあげ、名人と呼ばれるまでになつて、親方を大切に思う
長二の事ですから、清兵衛は養子の恒太郎よりも長二を可愛がりまして、五六日も顔を出
しませんと直に案じて、小僧に様子を見せにやるといふ程でございませうから、駈落同様の
始末と聞いて清兵衛は顔色の変るまでに心配をいたして居ります。

恒太郎も力と頼む長二の事ですから、心配しながら兼松を呼びに来て見ると、養父が心配の最中でありますから、

恒「兼、手前……長兄のことを父さんに云つたな、云わねえでも宜いに……父さん案じなくつても宜いよ、長二の居る処は直に知れるから」

清「手前長二の居る処を知つてるのか」

恒「大概分つてるから、明日早く捜しに行こう」

清「若えから何様な無分別を出すめいもんでもねえから、明日といわず早いが宜い、兼と一緒に今ツから捜しに行きな」

と急ぎ立てる老の一徹、性急なのは恒太郎もかね、知って居りますが、長二の居所が直に分ると申しましたのは、只年寄に心配をさせまいと思つての間に合せでございませうから、大きに当惑をいたし、兼松と顔を見合せまして、

恒「行くのアわけアねえが、今夜はのう兼」

兼「そうサ、行つて帰ると遅くならア親方、明日起きぬけに行きましよう」

清「其様なことを云つて、今夜の内に間違えでもあつたら何うする」

兼「大丈夫だよ」

清「手前は受合つても、本人が出て来て訳の解らねえうちは、己ア寝ても眠られねえから、御苦労だが早く行つてくんねえ」

と急立てられまして、恒太郎は余儀なく親父の心を休めるために

恒「そんなら兼、行つて来よう」

と立とうと致します時、勝手口の外で

「若え親方も兼公も行くにやア及ばねえ」

と声をかけ、無遠慮に腰障子を足でガラリツと押開け、どっこいと踰いて入りました

のは長二でございます。結城木綿の二枚布衣に西川縞の羽織を着て、盲縞の腹掛股引に白足袋という拵えで新しい麻裏草履を突かけ、何所で奢つて来たか笹折を提げ、微酔機嫌で楊枝を使いながらズツと上つて来ました様子が、平常と違いますから一同は恟りして、

兼「兄い、何うしたんだ、何処へ行つてたんだ、己ア心配したぜ」

長「何処へ行こうと己が勝手だ、心配するやつが間拔だ、ゲエープウー」

兼「やア珍らしい、兄い酔ってるな」

長「酔おうが酔うめえが手前の厄介になりアしねえ、大きにお世話だ黙っている」と清兵衛の前に胡座をかいて坐りました。

兼「何だか変だが、兄いが何うかしたぜ、コウ兄い……人にさん／＼心配をさせておいて悪体を吐くとア酷いじやアねえか」

長「生意気なことを吐かしやアがると打ち擲るぞ」

兼「何が生意気だい、兄い／＼と云やア兄いぶりアがって、手前こそ生意気だ」と互に云いつのりますから、恒太郎が兼松を控えさせまして、

恒「コウ長二、それじやアおとなしくねえ、手前が居なくなつたツて兼が心配しているのに、悪体を吐くのア宜くねえ、酔っているかア知らねえが、此处で其様なことをいつちやア済むめえぜ」

長「え、左様です、私が悪かつたから御免なせえ」

恒「何も謝るには及ばねえが、聞きやア手前家を仕舞つたそうだが、何処え行く積りだ」
長「何処へ行こうとお前さんの知つた事ちやアねえ」

と上目で恒太郎の顔を見る。血相が變つていて、氣味が悪うございますから、恒太郎

が後、遼あとしざりをする後に、最前から様子を見て居りました恒太郎の嫁のお政まさが、湯呑に茶をたつぷり注ついで持つてまいりました。

二十二

政「長さん、珍しく今夜は御機嫌だねえ：お前さんの居る所が知れないと云つて、お父とつさんや皆みんなが何様どんなに心配をしていたか知れないよ」

と茶を長二の前に置いて、

政「温ぬるいからおあがり、お夜食は未だゞろうね、大澤おおさわさんから戴おさいた鰯ぶりが味噌漬みそづけにし
てあるから、それで一膳おたべよ」

長「え、有あがとうがすが、今喰くったばかりですから」

と湯呑の茶を戴おいて、一口グツと飲みまして、

長「親方おやぢ……私わたしは遠方へ行く積しりです」

清「其様そのんなことをいうが、何所どこへ行くのだ」

長「京都へ行つて利齋りしやの弟子になる積しりで、家うちをしまつたのです」

清「それも宜いが、己も先の利齋の弟子で、毎も話す通り三年釘を削らせられた辛抱を仕通したお蔭で、是までになつたのだから、今の利齋ぐれえにやア指す積りだが……むゝあの鹿島さんの御注文で、島桐の火鉢と桑の棚を拵えたがの、棚の工合は自分でも好く出来たようだから見てくれ」

と目で恒太郎に指図を致します。恒太郎は心得て、小僧の留吉と二人で仕事場から桑の書棚を持出して、長二の前に置きました。

清「どうだ長二……この遠州透は旨いだろう、引出の工合なぞア誰にも負けねえ積りだ、これ見ろ、此の通りだ」

と抜いて見せるを長二はフンと鼻であしらいまして、

長「成程拙くアねえが、そんなに自慢をいう程の事もねえ、此の遣違えの留と透の仕事は嘘だ」

兼「何だと、コウ兄い……親方の拵えたものを嘘だと、手前慢心でもしたのか」

長「馬鹿をいうな、親方の拵えた物だつて拙いのもあらア、此の棚は外見は宜いが、五年経つてみねえ、留が放れて道具にやアならねえから、仕事が嘘だというのだ」

恒「何だと、手前父さんの拵えた物ア才植で一つや二つ擲つたつて毀れねえ事ア知つて

るじやアねえか」

長「それが毀れる様に出来てるからいけねえのだ」

恒「何うしたんだ、今夜は何うかしているぜ」

長「何うもしねえ、毎もの通り真面目な長二だ」

恒「それが何故父さんの仕事を誹すのだ」

長「誹す所があるから誹すのだ、論より証拠だ、才榎を貸しねえ、打毀して見せるから」

恒「面白い、毀してみろ」

と恒太郎が腹立紛れに才榎を持って来て、長二の前へ投げ出したから、お政は心配して、

政「あれまアおよしよ、酔ってるから堪忍おしよ」

恒「酔ってるかア知らねえが、余りだ、手前の腕が曲るから毀してみろ」

兼「若え親方……腹も立とうが姉さんのいう通り、酔ってるのだから我慢しておくな
せえ、不断此様な人じやアねえから、私が連れて帰って明日詫に來ます……兄い更けねえ
うちに帰ろう」

と長二の手を取るを振払いまして、

長「何ヨしやがる、己ア無宿だ、帰る所アねえ」

と云いながら才を取つて立上り、恒太郎の顔を見て、

長「今打き毀して見せるから其方へ退いていなせい」

と才槌を掲げて、躊躇く足を踏みしめ、柵の側へ摺寄つて行灯の蔭になるや否や、コ

ツン／＼と手疾く二槌ばかり当てると、忽ち釘締の留は放れて、遠州透はばら／＼

になつて四辺へ飛散りました。

二十三

言葉の行掛から彼アはいうものゝよもやと思つた長二が、遠慮もなく清兵衛の丹誠を尽した柵を打毀しました。且二つや三つ擲つたつて毀れる筈のない柵がばら／＼に毀れたのに、居合わす人々は驚きました。中にも恒太郎は長二が余りの無作法に赫と怒つて、突然長二の髻を掴んで仰向に引倒し、拳骨で長二の頭を五つ六つ続けさまに打擲りましたが、少しもこたえない様子で、長二が黙つて打たれて居りますから、恒太郎は燥立ちで、側に落ちている才槌を取つて打擲ろうと致しますに、お政が驚いて其の手に縫りつい

て、

政「あれまア危ないからおよしよ、怪我をさせては悪いからサ兼松……速く留めておくれ」

兼「まアお待ちなせえ、其様な物で擲つちア大変だ」

と止めるのを恒太郎は振払いまして。

恒「なに此の野郎、ふざけて居やがる、此の才槌で棚を毀したから己が此の野郎の頭を打毀してやるんだ」

と才槌を振り上げました。此の騒ぎを最前から黙って視て居りました清兵衛が、

清「恒マア待て、よしねえ、打棄つておけ」

と留めましたが、恒太郎はなかく肯きません。

恒「それだツて此様に毀してしまつちやア、明日鹿島さんへ納める事が出来ねえ」

清「まア己が言訳をするから宜いというに」

と叱りつけましたので、恒太郎、余儀なく手を放したから、お政も安心して長二を引起しながら、

政「何処も痛みはしないか、堪忍おしよ」

長「へい、有がとうがす」

と会釈をして坐り直す長二の顔を、清兵衛がジツと視まして、

清「これ長二手前てめえ能く吾の拵おれこせえた棚を毀したな、手前は大層上手になった、己の仕事に嘘があるとは感心だ、何処に嘘があるか手前の気の付いた所を一々其処で云つて見ろ」

長「へい、云えというなら云いますが、此の広い江戸で清兵衛と云やア知らねえ者のねえ指物師の名人だが、それア二十年も前めえのことだ、もう六十を越して眼も利かなくなり、根気も脱ぬけて、此の頃いたけずりア板いたけずり削いたけずりまで職人にさせるから、艶つやが無くなつて何処となしに仕事よなべが粗あらびて、見られた状ざまアねえ、私わっちが弟子に來た時分は釘一本他手ひとてにかけず、自分で夜延よなべに削つて、精神たましいを入れて打ちなさつたから百年経つても合えいくち口の放れつッこは無かつたが、今じやア此のからツペたの恒兄あにいに削あにいらせた釘を打ちなさるから、此ん通りで状ざまア無い、アハハハ」

と打毀した棚に指をさして嘲笑あざわらいますから、兼松は氣を揉んで、長二の袖をそつと引きまして、

兼「おい兄い何うしたんだ、大概ていげえにしねえ」

と涙声で申しますが、一向に頓とんじやく着あいたしません。

長「才槌せえづちで二つや三つ擲なつて毀れるような物が道具になるか、大概たいがい知れた事ことだ、老碌らうろくしちやア駄目だだ」

と法外ぼうがいな雑言ざうごんを申しますから、恒太郎こうたろうが堪こたえかねて拳骨こぶねを固めて立かゝろうと致いたしますを、清兵衛せいべゑが睨にらみつけましたから、齒は軋ぎしりをして扣ひかえて居ります。

長「その証拠しんこにやア十年前めねん私わたしに何と云いなすつた、親方おやぢ忘れやしないだろう、箱はこというものは木を寄せて拵こせえるものだから、暴あくすりア毀れるのが当あたりめえ然しかだ、それが幾いくら使つても百年も二百年も毀れずに元のまんまで居るといふののア仕事しごとに精神たましいを入れてするからの事だ、精神たましいを入れるといふのは外ひとじやアねえ、釘くわいの削り塩梅しんばいから板いの拵こせえ工合くわいと釘くわいの打ち様さまにあるんだ、それだから釘くわい一本いっぴん他にひたに削ひらせちやア自分の精神たましいが入いらねえところが出来て、道具どうぐが死しんでしもうのだ、死しんでる道具どうぐは直ちに毀れこつちまうと云つたじやアありやせんか、其そのの通りしねえから此この棚たなの仕事しごとは嘘うそだと云うのだ、此様こゝに直ちぐ毀れる物ものを納なめるののア注文ちゆうもん先まへ対たいして不実ふじつといふものだ、是こゝで高たかい工手間くでまを取とろうとは盗人ぬすひとより太ふえ了簡りょうかんだ」

と止途とめどなく罵ののります。

二十四

清兵衛も腹にすえかね、

清「黙りやアがれ、馬鹿野郎め、生意氣を吐しやアがると承知しねえぞ、坂倉屋の仏壇で名を取ったと思つて、高言を吐きアがるが、手前がそれほど上手になつたのア誰が仕込んだんだ、其の高言は他へ行つて吐くが宜い、己の目からはまだ板挽の小僧だが、己を下手だと思ふなら止せ、他に對つて己の弟子だといふなよ」

長「さア、それだから京都へ修業に行くのだ、親方より上手な師匠を取る氣だ」

恒「呆れた野郎だ、父さん何うしよう」

兼「正氣でいふのじやアねえ」

清「氣違だらう、其様な奴に構うなよ」

兼「おい、兄い、どうしたんだ、本当に氣でも違つたのか」

長「べらぼうめ、氣が違つてたまるもんか、此様な下手な親方に附いていちやア生
涯 仕事のしりツこがねえから、己の方から断るんだ」

清「長二、手前本当に其様なことをいふのか」

長「嘘を吐いたツて仕方がねえ、私が京都で修業をして名人になツたつて、己の弟子だと云わねえように縁切の書付をおくんなせえ」

清「べらぼうめ、手前のような奴ア、再び弟子にしてくれろと云つて来ても己の方からお断りだ」

長「書付を出さねえなら、此方で書いて行こう」

と傍にある懸硯箱を引寄せて鼻紙に何か書いて差出しましたから、清兵衛が取上げて見ますと、仮名交りで、

一私是まで親方のおせわになつたが今日あいそがつきたから縁を切ります然る上は親方でないあかの他人で何事も知らないから左様おぼしめし被下候

文政巳十月十日

長二郎

箱清様

とありますから清兵衛は変に思つて眺めておりますを、恒太郎が横の方から覗き込んで、恒「馬鹿な野郎だ、弟子のくせに此様な書付を出すとア……おや、長二は何うかしているんだ、今月ア霜月だのに十月と書いてあるア、月まで間違えていやアがる」

長「そりやア知ってるが、先月から愛想が尽きたから、そう書いたんだ」

恒「負^{まけおし}惜みを云やアがるな、此様な書付を張ったからにやア二度と再び^{うち}家の敷居^{また}を跨ぎやアがると肯^きかねいぞ」

長「そりやア知れた事^{こと}た、此の書付を渡したからにやア此家^{こつち}に何^どんな事があつても己^{おら}ア知らねえよ、また己の体に何様^{どん}な間違えがあつても御迷惑アかけねえから、御安心なせいやし」

と立上つて帰り支度を致しますが、余りの事に一同は呆れて、只互いに顔を見合すばかりで何にも申しませんから、お政が心配をして、長二の袂を引留めまして、

政「長さんお待ちよ……まアお待ちというのに、お前それでは済まないよ、よもやお忘れではあるまい、廿年前の事を、私は其の時十三か四であつたが、お前がお母^{つか}に手を引かれて宅^{うち}へ来た時に、私のお母^{つか}さんがマア十^{とお}や十一で奉公に出るのは余^{あんま}り早いじやアないかと云つたら、お前何とお云いだ、お母^{ふくろ}がとる年で、賃仕事をして私を育てるのに骨が折れるから、早く奉公をして仕事を覚え、手間を取つてお母に楽をさせたいとお云いだツたろう、お母さんがそれを聞いて、涙をこぼして、親孝行な子だ、そういう事なら何^どの様にも世話をしようと云つて、自分の子のように可愛がったのはお忘れじやアなからう、また其

の時お前の名は二助と云つたが、伊助という職人がいて、度々間違うからお父さんが長二
という名をお命けなすつたんだが、是にも訳のある事で、お前の手の人指が長くつて
中指と同じのを御覧なすつて、人指の長い人は器用で仕事が上手になるものだから、指が
二本とも長いところで長二としよう、京都の利齋親方の指も此の通りだから、此の
小僧も仕立てようで後には名人になるかも知れないと云つて、他の職人より目をかけて丁
寧に仕事を教えてくださつたので、お前斯うなつたのじゃアないか、それに又お前のお母
が歿つた時、お父さんや清五郎さんや良人で行つて、立派に葬式を出して上げたろ
う、お前は其の時十七だツたが、親方のお蔭で立派に孝行の仕納めが出来た、此の御恩は
死んでも忘れないと涙を流してお云いだというじゃアないかね、元町へ世帯を持つ時も
左様だ、寝道具から膳椀まで皆なお前お父さんに戴いたのじゃアないか、此様なことを云
つて恩にかけるのじゃアないが、お前左様いう親方を袖にして、自分から縁切の書付を出
すとア何うしたものだえ、義理が済むまいに、お前考えてごらん、多くの弟子の中で一番
親方思いと云われたお前が、此様な事になるとは私にはさっぱり訳が分らないよ」

政「恒兄に擲たれたのが腹が立つなら、私が成代なりかたつて謝るからね、何だね、子供の時から一つ処とこで育つた心安だてが過ぎるからの事だよ、堪忍おしよ、お父さんもお年がお年だから、お前でもないかと良人うちのひとが困るからよ、お父さんへは私がお詫をするから、長さんマアちゃんとお坐んなさいよ、何うしたのだねえ」

と涙を翻こぼしてなだめます信実しんじつに、兼松も感じて鼻をすゝりながら、

兼「コウ兄い、いま姉あねさんという通りだ、親方の恩は大抵こつの事ちやアねえ、それを知らねえ兄いでもねえに、何うしたんだ、何か人なんにしゃくられでもしたのか、えゝ、姉さんが心配しんぱいするから、おい兄い」

長「お政さん御親切は分りやしたが、弟子師匠の縁が切れてみりやア詫言わびことをする訳もねえからね、人は老少ろうしようふじよう不定ふじようで、年をとつた親方いゝや、清兵衛さんより私わっちの方が先へ往くかも知れませんか、他ひとを当あてにするのア無駄だ、何でもてんでに稼ぐのが一番だ、稼いで親に安心をさせなさるが宜い、私の体に何様どんな事があるうと、他人だから心配しんぱいなせいやすな……兼、手前てめえとも最もう兄弟きょうだいじゃアねえぞ」

と云放つて立上り、勝手口へ出てまいりますから、お政も呆れまして、

政「そんなら何うでもお前は」

長「もう参りません」

清「長二」

長「何か用かえ」

清「用はねい」

長「左様だろう、耄碌爺には己も用はねえ」

と表へ出て腰障子を手荒く締切りましたから、恒太郎は堪えきれず、

恒「何を云いやがる」

と拳骨げんこを固めて飛出そうとするのを清兵衛が押止めまして、

清「打棄つておけ」

恒「だツて余りだ」

清「いゝや左様でねえ、是には深い仔細わけのある事だろう」

恒「何様な仔細があるかア知らねえが、父とつさんの拵こせえた棚たを打ち毀して縁切の書付を出

すとア、話にならねえ始末だ」

清「それがサ、彼奴己あいつの拵こせえた棚の外から三つや四つ擲つたツて毀れねえことを知って

るから、先刻打擲さつきぶんなぐった時、故わざツと行灯かげの陰かげになつて、暗くれい所で内うちの方かたから打たきやアがつたのは、無理に己を怒らせて縁切の書付を取ろうと企たくんだのに相違たぐねえが、縁を切つて何うするのか、十一月を十月と書いたのにも仔細しさいのある事だろう、二三日経つたら何か様子が知れようから打棄なげつておきねえ」

と一同をなだめて案じながら寢床に入りました。其の頃南の町奉行は筒井つゝい和泉守いづみのかみ様で、お慈悲深く御裁ごさいきが公平という評判で、名奉行でございました。丁度今月はお月番ですから、お慈悲のお裁ごさいきにあずかろうと公事訴訟が沢山に出ます。今日こんにちは十一月の十一日じゅういちにちで、追々白洲へ呼込みになる時刻に相成りましたから、公事の引合に呼出された者は五人ごにんと一ひと群むれになつて、御承知の通り数寄屋橋内うちの奉行所の腰掛茶屋こしに集つていますを、やがて奉行屋敷の鉄網かねあみの張つてある窓から同心どうしんが大きな声をして、

「芝新門前しばしんもんぜん町高井利兵衛貸金催促かいはいりへえ一件一同入りましょう」

など、呼込みますと、その訴訟の本人相手方、只今では原告被告と申します、双方の家いえ主ぬし五人組は勿論、関係の者一同がごたくく白洲へ這入ります。此の白洲の入口の戸を締し切る音ががらくくピシャーリツと凄すさまじく脳天のうてんに響ひびけますので、大抵たいていの者は仰天おうえんして怖おそくありませんから、嘘うそを吐つくことが出来なくなつて、有ありてい体に白状はくじょうをいたすようになるという事

でございます。今大勢の者が白洲へ呼込みになる混雑の中を推分けて、一人の男が御門内へ駈込んで、当番所の前へ平伏いたしました。此の男は長二でございます。

二十六

当番所には同心一人と書役一人が詰めておりまして、

同「何だ」

長「へい、お訴えがございます」

同「ならない」

と叱りつけて、小者に門外へ逐出させました。この駈込訴訟と申しますものは、其の筋の手を経て出訴せいといって、三度までは逐返すのが御定法でございますから、長二も三度逐出されましたが、三度目に、此の訴訟をお探上げになりませんと私の一命に拘わりますと申したので、お探上げになつて、直に松右衛門の手で腰縄をかけさせまして入牢と相成り、年寄へ其の趣きを届け、一通り取調べて奉行附の用人へ申達して、吟味与力へ引渡し、下調をいたします、これが只今の予審で、それから奉行へ申立て、本

調になるといふ次第でございます。通常の訴訟は出訴の順によつてお調べになります。が、駈込訴訟は猶予の出来ない急ぎの事件といふので、他の訴訟が幾許あつても、それを後へ廻して此の方を先へ調べるのが例でありますから、奉行は吟味与力の申立てにより、他の調を後廻しにして、いよく長二の事件の本調をいたす事に相成りました。指物師清兵衛は長二が先夜の拳動を常事でないといふと勘付きましたから、恒太郎と兼松に言付けて様子を探らせると、長二が押上堤で幸兵衛夫婦を殺害したと南の町奉行へ駈込訴訟をしたので、元町の家主は大騒ぎで心配をして居るといふ兼松の注進で、さては無理に喧嘩を吹かけて弟子師匠の縁を切り、書付の日附を先月にしたのは、恩ある己達を此の引合に出すまいとの心配であろうが、此の事を知つては打棄つて置かれぬ、何の遺恨で殺したのか仔細は分らないが、無闇な事をする長二でないから、お採上げにならないまでも、彼奴が親孝心の次第から平常の心がけと行いの善い所を委しく書面に認めて、お慈悲願をしなけりやア彼奴の志に対して濟まないとは思ひましたが、清兵衛は無筆で、自分の細工をした物の箱書は毎でも其の表に住居いたす相撲の行司で、相撲膏を売る式守伊之助に頼んで書いて貰う事でありませうから、伊之助に委細のことを話して右の願書を認めて貰い、家主同道で恒太郎が奉行所へお慈悲願に出ました。今日は龜甲屋幸兵衛夫婦殺害一件の

本調というので、関係人一同町役人家主五人組差添で、奉行所の腰掛茶屋に待つて居ります。やがて例の通り呼込になつて一同白洲に入り、溜と申す所に控えます。奉行の座の左右には継肩衣をつけた目安方公用人が控え、縁前のつくばいと申す所には、羽織なしで袴を穿いた見習同心が二人控えて居りまして、目安方が呼出すに従つて、一同が溜から出て白洲へ列びきると、腰縄で長二が引出され、中央へ坐らせられると、間もなくシーという制止の声と共に、刀持のお小姓が随いて、奉行が出座になりました。

二十七

白洲をずうツと見渡されますと、目安方が朗かに訴状を讀上げる、奉行はこれを篤と聞き了りまして、

奉「浅草鳥越片町幸兵衛手代萬助、本所元町與兵衛店恒太郎、訴訟人長二郎並びに家主源八、其の外名主代組合の者残らず出ましたか」

町「一同附添いましてござります」

奉「訴人長二郎、其の方は何歳に相成る」

長「へい、二十九でござります」

奉「其の方当月九日の夜五つ半時、鳥越片町龜甲屋幸兵衛並に妻柳を柳島押上堤において殺害いたしたる段、訴え出たが、何故に殺害いたしたのじや、包まず申上げい」

長「へい、只殺しましたので」

奉「只殺したでは相済まんぞ、殺した仔細を申せ」

長「其の事を申しますと両親の恥になりますから、何と仰しやっても申上げる事は出来ません……何卒只人を殺しました廉で御処刑をお願い申します」

奉「幸兵衛手代萬助」

萬「へい」

奉「これなる長二郎は幸兵衛方へ出入をいたしおった由じやが、何か遺恨を挟むような事はなかつたか、何うじや」

萬「へい、恐れながら申上げます、長二郎は指物屋でございますから、昨年の夏頃から度々、誂え物をいたし、多分の手間代を払い、主人夫婦が格別鼻眞にいたして、度々長二郎の宅へも参りました、其の夜死骸の側に五十兩の金包が落ちて居りましたのもって見ますと、長二郎が其の金を奪ろうとして殺しまして、何かに慌て、金を奪らずに遁げた

ものと考えます」

奉「長二郎どうじゃ、左様か」

長「其の金は私が貰ったのを返したので、金なぞに目をくれるような私じゃアございません」

奉「然らば何故に殺したのじゃ、其の方の為になる得意先の夫婦を殺すとは、何か仔細がなければ相成らん、有体に申せ」

恒「恐れながら申上げます、長二は差上げました書面の通り、私親共の弟子でございまして、幼少の時から親孝心で実直で、道楽ということは怪我にもいたしませんで、余計な金があると正直な貧乏人に施すくらいで、仕事にかけては江戸一番という評判を取つて居りますから、金銭に不自由をするような男ではござりませんから、悪心があつてした事では無いと存じます」

源「申上げます、只今恒太郎から申上げました通り、長二郎は六年ほど私店内に住居いたしました。が只の一度夜宅を明けたことの無い、実体な辛抱人で、店賃は毎月十日前に納めて、時々釣は宜いから一杯飲めなぞと申しまして、心立の優しい慈悲深い性で、人なぞ殺すような男ではござりません」

萬「へい申上げます、私主人方わたくしで昨年わたくしの夏から長二に払いました手間料は、二百両足らずに相成ります、此の帳面を御覽を願います」

と差出す帳面を同心が取次いで、目安方が読上げます。

奉「この帳面は幸兵衛の自筆か」

萬「へい左様でございます、此の通り格別鬮頁わたくしにいたしましたして、主人の妻さいは長二郎に女房の世話を致したいと申して居りましたから、私の考わたくしえますには、其の事を長二郎に話しましたのを長二郎が訝わかしく暁さとつて、無礼な事でも申しかけたのを幸兵衛に告げましたので、幸兵衛が立腹いりどめいたして、身分が身分でございますから、後あとで紛いさくさ紘きんの起らないように、出入留いりどめの手切金を夫婦で持つてまいったもんですから、此の事が世間へ知れては外聞にもなり、殊に恋のかなわなくやしまぎまぎに、兩人を殺したんであろうかとも存じます」

奉「長二郎、此の帳面の通り其の方手間料を受取ったか而そうして柳が其の方へ嫁くの口入にゆうをいたしたか何うじや」

長「へい、よくは覚えませんが、其の位受取ったかも知れませんが、決して余計な物は貰やアしません、又嫁を貰えと云った事はありませんが、私わたくしが無礼なことを云いかけたなぞとは飛んでもない事でございます」

奉「それはそれで宜しいが、何故斯様に鼻頂になる得意の恩人を殺したのじゃ、何ういう恨か有体に申せ」

長「別に恨というはございませんが、只あの夫婦を殺したくなりましたから殺したのでございませす」

奉「黙れ……其の方天下の御法度を心得ぬか」

長「へい心得て居りますから、遁げ隠れもせずにお訴え申したのでございませす」

奉「黙れ……有体に申上げぬは御法に背くのじゃ、こりや何じやな、其の方狂氣いたして居るな」

恒「申上げませす、仰せの通り長二郎は全く逆上せて居ると存じます、平常斯ういう男ではございませせん、私親共は今、年六十七歳の老体で、子供の時分から江戸一番の職人にまで仕上げました長二郎の身を案じて、夜も碌に眠りません程でございませすによつて、何卒老体の親共を不便と思召して、お慈悲の御沙汰をお願い申します、全く気違に相違ございませんから」

萬「成程気違だろう、主のある女に無理を云いかけて、此方で内証にしようと思つたのを肯かずに、大恩のある出入場の旦那夫婦を殺すとア、正気の沙汰ではございませすまい」

奉「萬助……其の方の主人夫婦を殺害いたしました長二郎は狂人で、前後の弁えなくいたした事と相見えるが何うじや」

萬「へい、左様でございましょう」

奉「町役人共は何と思う、奉行は狂気じやと思うが何うじや」

一同「お鑑定めがねの通りと存じます」

とお受けをいたしました。仔細を知りませんから、長二が人を殺したのは全く一時発狂をいたした事と思うたのでございましょうが、奉行は予て邸かねやしきへ出入をする蔵前の坂倉屋の主人から、長二の身持の善よき事と伎倆うでまえの非凡なることを聞いても居り、且長二が最初に親の恥になるから仔細は云えぬと申した口上に意味がありそうに思われますから悪意があつて、殺したので無いということは推察どうかいたし、何卒此の名人を殺したく無いとの考えで取調べると、仔細を白状ことばしませんから、これを幸いに狂人にして命を助けたいと、語ことばを其の方へ向けて調べるのを、伶俐りこうな恒太郎が呑込んで、氣違に相違ないと合あ槌いづちを打つに、引込まれるとは知らず萬助までが長二を悪くする積りで、正氣の沙汰でないと申しますから、奉行は心の内で窃ひそかに喜んで、一同に念を押して、愈々いよく狂人の取扱いにしようと致しますと、長二は案外に立腹りようがんをいたしましたして、兩眼りようがんに血を濺そぎ、額に青筋を現わし拳

を握りつめて、白洲の隅まで響くような鋭き声で、

長「御奉行様へ申し上げます」

と云つて奉行の顔を見上げました。

二十八

さて長二郎が言葉を更めて奉行に向いましたので、恒太郎を始め家主源八其の他の人々は、何事を云出すか、お奉行のお慈悲で助命になるものを今さら余計なことを云つては困る、而て見ると愈々本当の氣違であるかと一方ならず心配をして居りますと、長二は奉行の顔を見上げて、

長「私は固より重い御処刑になるのを覚悟で、お訴え申しましたので、又此の儘生延びては天道様へ済みません、現在親を殺して氣違だと云われるを幸いに、助かろうなどという了簡は毛頭ございません、親殺しの私ですから、何卒御法通りお処刑をお願い申し上げます」

奉「フム……然らば幸兵衛夫婦を其の方は親と申すのか」

長「左様でございます」

奉「何ういう仔細で幸兵衛夫婦を親と申すのじや、其の仔細を申せ」

長「此の事ばかりは親の恥になりますから申さずに御処刑を受けようと思いましたが、仔細を云わなけりやア氣違だと仰しやるから、致し方がございません、其の理由わけを申上げますから、お聞取りをお願い申します」

とそれより自分の背中に指の先の入る程の穴があるのを、九歳こゝのつの時初めて知つて母に尋ねると、母は泣いて答えませんので、自分も其の理由を知らずにいた処、去年の十一月職人の兼松と共に相州の湯河原で湯治中、温泉宿へ手伝に來た婆さんから自分は棄児すてこであつて、背中の穴は其の時受けた疵である事と、長左衛門夫婦は実の親まことでなく、実の親は名前は分らないが、斯々かく／＼しか／＼の者で、自分達の悪い事を掩おおわんがために棄てたのであるという事を初めて知つて、実の親の非道を恨み、養ひ親の厚恩に感じて、養ひ親のためめ仏事を営み、菩提所の住持に身の上を話した時、幸兵衛に面会したのが縁となり、其の後種々のちろ／＼の注文をして過分の手間料を払い、一方ひとかたならず鼻肩にして、度々尋ねて來る様子が如何にも訝おかしくあり、殊に此の四月夫婦して尋ねて來た時、お柳が急病を発おこし、また此の九月柳島の別荘で余儀なく身の上を話して、背中の疵を見せると、お柳が驚おどいて癩しやくを発

した様子などを考えると、お柳は自分を産んだ実の母らしく思えるより、手を廻して幸兵衛夫婦の素性を探索すると、間違いなさそうでもあり、また幸兵衛が菩提所の住持に自分の素性を委しく尋ねたとの事を聞き、幸兵衛夫婦も自分を実子と思つては居れど、棄児にした廉があるから、今さら名告りかね、余所ながら鼻眞にして親しむのに相違ないと思う折から、去る九日の夕方夫婦して尋ねて来て、親切に嫁を貰えと勧め、その手当に五十兩の金を遣るというので、もう間違いはないと思つて、自分から親子の名告をしてこれと迫つた処、お柳は頭われたと思ひ、悔りして逃出そうとする、幸兵衛は其の事が知れては身の上と思つたと見え、自分を氣違だの騙だのと罵りこづきまわして、お柳の手を取り、逃歸つたが、斯様な人から、一文半錢たゞ貰う謂れがないから、跡に残つていた五十兩の金を返そうと二人を逐かけ、先へ出越して待つてゐる押上堤で、図らずお柳の話を聞き正しく実の母親と知つたから、飛出して名告つてくれと迫るを、幸兵衛が支えて、粗暴を働き、短刀を抜いて切ろうとするゆえ、これを奪い取ろうと悶着の際、兩人に疵を負わせ、遂に落命させしと、一点の偽りなく事の顛末を申し立てましたので、恒太郎源八を始め、孰れも大きに驚き、長二の身の上を案じ、大抵にしておけと云わぬばかりに、源八が窃と長二の袖を引くを、奉行は疾くも認められまして、

奉「こりや止むるな、控えておれ」

二十九

奉「長二郎、然らば其の方は全く両親を殺害致したのじやな」

長「へい……まア左様いう次第ではございますが、幸兵衛という人は本当の親か義理の親か未だ判然分りません」

奉「左様か……こりや萬助、其の方幸兵衛と柳が夫婦になったのは何時か存じて居るか」
 萬「へい、たしか五ヶ年前と承りましたが、私は其の後に奉公住をいたしましたので」

奉「夫婦の者は当年何歳に相成るか存じて居るか」

萬「へい幸兵衛は五十三歳で、柳は四十七歳でございます」

奉「左様か」

と奉行は眼を閉じて暫時思案の様子でありましたが、白洲を見渡して、
 奉「長二郎、只今の申立てに聊かも偽りはあるまいな」

長「けちりんも嘘は申しません」

奉「追つて吟味に及ぶ、長二郎入牢申付ける、萬助恒太郎儀は追つて呼出す、一同立ちませい」

是にて此の日のお調べは相済みましたが、筒井侯は前にも申述べました通り、坂倉屋の主人又は林大學頭様から、長二の伎倆の非凡なる事を聞いておられますから、斯様な名人を殺すは惜いもの、何とかして助命させたいとの御心配で、狂人の扱いにしようと思召したのを、長二は却つて怒り、事実を明白に申立てたので、折角の心尽しも無駄になりましたが、その気性の潔白なるに益々感服致されましたから、猶工夫をして助命させたいと思召し、一先ず調べを止めてお邸へ帰られました。当今は人殺にも過失殺故殺謀殺などとか申して、罪に軽重がございませうから、少しの云廻しで人を殺しても死罪にならずにしまいますが、旧幕時代の法では、復讐の外は人を殺せば大抵死罪と決つて居りますから、何分長二を助命いたす工夫がございませうので、筒井侯も思案に屈し、お居間に閉籠つて居られますを、奥方が御心配なされて、

奥「日々の御繁務さぞお気疲れ遊ばしましやう、御鬱散のため御酒でも召上り、先頃召抱えました島路と申す腰元は踊が上手とのこととございませうから、お慰みに御所望

遊ばしては如何いかゞでございます

和泉「ム、その島路と申すは出入町人助七の娘じゃな」

奥「左様にございます」

和「そんなら踊の所望は兎も角も、これへ呼んで酌を執とらせい」

と御意ぎよゝいがございましたから、時を移さずお酒宴の支度が整といまして、殿様附と奥方附おくさま

のお小姓お腰元奥女中が七八人ずらりツと列ならびまして、雪洞ほんぼりの灯あかりが眩まぶしいほどつきまし

た。此の所へ文金ぶんきんの高鬚たかまげに紫の矢筈やはすがすり緋の振袖で出てまいりましたのは、浅草蔵前の

坂倉屋助七の娘お島で、当お邸やしきへ奉公あがに上り、名を島路と改め、お腰元になりましたが、

奥方附おくがたでございますから、殿様にはまだお言葉を戴いた事がありません、今日のお召は

何事かと心配しながら奥方うしろの後へ坐つて、丁寧に一礼をいたしますを、殿様が御覧遊ぼし

て、

和「それが島路か、これへ出て酌をせい」

との御意でありますから、島路は恐るゝ横の方へ進みましてお酌を致しますと、殿様

は島路の顔を見詰めて、盃の方がおるすになりましたから、手が傾こぼいて酒が翻こぼれますのを、

島路が振袖の袂で受けて、盃へ一滴もこぼしません、殿様はこれに心付かれて、残りの酒

を一口に飲みほして、盃を奥方へさゝれましたから、島路は一礼をして元の席へ引退ひきさがろ
うと致しますのを、

和「島路待て」

と呼留められましたので、並居る女中達は心の中で、さては御前様は島路に思召がある
など互に袖を引合つて、羨ましく思つて居ります、島路はお酒のこぼれたのを自分の粗相
とでも思召して、お咎めなさるのではあるまいかと両手を突いたまゝ、其処そこに居まつ
ておりますと、殿様は此方こつちへ膝を向けられました。

三十

和「ちよつと考え事を致して粗相をした、免ゆるせ……其方そちに尋ねる事があるが、其方も存
じて居おるであろう、其方の家へ出入をする木具職の長二郎と申す者は、当時江戸一番の名
人であると申す事を、其方の父から聞及んで居るが、何ういう人物じゃ、職人じやによつ
て別に取柄とりえはあるまいが、何ういう性質の者じゃ、知らんか」

との御意に、島路は予かねて長二が伎倆うでまえの優れて居おるに驚いて居るばかりでなく、慈善を

好む心こころだて立たの優しいのに似ず、金銭や威光に少しも屈せぬ見識の高いのに感服して居ります事ゆえ、お尋ねになつたを幸い、お邸やしきのお出入にして、長二を引立て、やろうとの考えで、

島「お尋ねになりました木具職の長二郎と申します者は、親共が申上げました通り、江戸一番の名人と申す事で、其の者の造りました品は百年経つても狂いが出ませず、又何程てあら粗暴こに取扱ひましても毀れる事がないと申すことでございます、左様な名人で多分な手間料を取りますが、衣類などは極々ごくごく質素で、悪遊びをいたさず、正直な貧乏人を憐れんで救助するのを楽したのしみにいたしますに就つては、女房があつては思ふまゝに金銭を人に施すことが出来まいと申して、独身で居ります程の者で、職人には珍らしい心掛で、其の気性の潔白なものには親共も感心いたして居ります」

和「フム、それでは普通の職人が動やともすると喧嘩口論をいたして、互に疵をつけたりするような粗暴な人物じゃないの」

島「左様でございます、あゝ、いう心掛では無益な喧嘩口論などは決して致しますまいと存じます、殊に御酒は一滴も戴きませんと申す事でございますゆえ、過あやまちなどは無いこと、存じますが、只今申上げました通り潔白な気性でございますゆえ、他ひとから恥辱でも受けま

した節は、その恥辱を雪ぐまでは、一命を捨て、も飽くまで意地を張るといふ性根の確かりいたした者かとも存じます」

和「ム、左様じゃ、其方の目は高い……長二郎は左様いう男だろうが、同人の親達は何ういう者か其方は知らんか」

島「一向に存じません」

和「そんなら誰か長二郎の素性や其の親達の身の上を存じて居る者はないか、其方は知らんか」

と根強く長二郎のことを穿鑿される仔細が分りませんから、奥方が不審に思われまして、

島「御前様、その長二郎とか申す者のお聞き遊ばして、如何遊ばすのでござります」

と尋ねられたので、殿様は長二郎を助ける手段もあろうかとの熱心から、うか／＼島路に根問いをした事に心付かれましたが、お役向の事を此の席で話すわけにも参りませんから、笑いに紛らして、

和「何サ、その長二郎と申す者は役者のような美しい男じゃよによって、島路が懸想でもし

て居るなら、身が助七に申聞けて夫婦にしてやろうと思うたのじゃ」

と一時の戯にして此の場の話を打消そうと致されましたのを、女中達は本当の事と思つて、羨ましそうに何れも島路の方へ目を注ぎますので、島路は羞かしくもあり、又思いがけない殿様の御意に驚き、顔を赧らめて差俯いて居りますを、奥方は気の毒に思召して、

「如何に御前様の御意でも、こりや此の所では御挨拶が成りますまいのう島路」

と奥方にまで問詰められて、島路は返答に困り、益々顔を赧くしてもじくじくいたして居りますと、女中達は羨ましそうに、

春野「島路さん、何をお考え遊ばします、願つてもない御前様の御意、私なら直にお受けをいたしますのに、お年がお若いせいか、ぐずくして」

常夏「春野さんの仰しやる通り、此の様な有難い事はごせんせぬ、それとも殿御の御器量がお錠口の金壺さんのようななら、私のような者でも御即答は出来ませんが、その長二郎さんという方は役者のような男だと御前様が仰しやったではござりませぬか」

千草「そのうえお仕事が江戸一番の名人で、お金が沢山儲かるとの事」

早咲「そればかりでも結構すぎるに、お心立が優しくつて、きりくと締つた所があると

は、嘘のような殿御振り、お話を承わりましたばかりで私はずい、ホ、……オホ、は、」
と女中達のはしたなきお喋りも一座の興でございます。

三十一

殿様は御機嫌よろしく打笑まれました、

和「どうじや島路、皆の者は話を聞いたばかりで彼様に浮れて居るに、其方は何故鬱ぐのじや」

と退引のつびきのならんお尋ねを迷惑には思いましたが、此の所で一言申しておかなければ、殿様が自分を他の女中達のように思召して、万一父助七へ御意のあつた時は、否やを申し上げることも出来ぬと思ひましたから、羞かしいのを堪えまして、少し顔を上げ、

島「だんくの御意は誠に有難う存じますが、何卒此の儀は御沙汰止にお願い申し上げます、長二郎は伎倆うでまえと申し心立と申し、男として不足の廉かじは一つもございませぬが、私家は町人ながらも系図正しき家筋でございますれば、身分違いの職人の家へ嫁入りを致しましては、第一先祖へ濟みませず、且世間で私の不身持から余儀なく縁組を致したのであ

うなぞと、風聞をいたされまゝのが心苦しゅうございますれば、何卒此の儀は此の場ぎり御沙汰止にお願い申上げます」

ときつぱり申述べました。追々世の中が開けて、華族様と平民と縁組を致すようになって、今の御子様方は、この島路の口上をお聞きなすつては、開けない奴だ、町人と職人とどれほど程の違がある、頑固にも程があると仰しやいませうが、其の頃は身分という事がやかましくなつて居りまして、お武家と商人とは縁組が出来ません、抛所なく縁組をいたす時は、其の身分に依じて仮親を拵えますことで、商人と職人の間にも身分の分ちが立つて居りました、殊に身柄のある商人はお武家が町人百姓を卑しめる通り、職人を卑しめたものでございますから、島路は長二郎を不足のない男とは思つて居りますが、物の道理を心得て居るだけに、此の御沙汰を断つたのでございます。殿様は元来左様いふ思召ではなく、只此の場の話を紛らせようと、戯れ半分に仰しやつたお言葉が本当になつたので、取返しがつかず、困つておられた処へ、島路が御沙汰止を願いましたから、これを幸いに、

和「おゝ、何も身が無理に左様いふのではない、左様いふことなら今の話は止めにするから、島路大儀じゃが下物に何か一つ踊つて見せい」

と踊りの御所望ごしよもうがございましたから、女中達は俄に浮き立ちまして、それ／＼の支度をいたし、さア島路さん、早くと急せぎ立てられて、島路は迷惑ながら一旦其の席ひきを引退がりまして、斯かよう様な時の用心に宿から取寄せて置いた衣裳を着けて出ました、容貌は一段に引立つて美しゆうございまして、殿様が早くとのお詞ことばに随まい、島路は憶する色なく立上りまして、珠たまとり取の段を踊りますを、殿様は能くも御覧にならず、何か頻しきりに御思案の様子でございましたが、踊の半頃なかごろで、

和「感服いたしました、最もうよい、疲れたであろう、休息いたせ」

と踊を差止め、酒さけ肴さかなを下げさせ、奥方を始め女中達を遠ざけられて、俄に腹心の吟味よと力ちから吉田駒二郎よしたこまじろうと申す者をお召になりました、夜の更けるまで御密談をなされたのは、全く長二郎の一件に就いて、幸兵衛夫婦の素性を取調べる手懸りを御相談になったので、略ぼく探索の方も定まりましたと見え、駒二郎は御前しりぞを退いて帰宅いたし、直に其の頃探偵捕と者の名人と呼ばれた金太郎きんたろう繁藏しげぞうという二人の御用聞を呼寄せて、御用の旨を申含めました。

町奉行筒井和泉守様は、長二郎ほどの名人を失うは惜おしいから、救う道があるなら助命すけいのちさせたいと思召ぼかす許りではございません、段々吟味の模様を考えますと、幸兵衛夫婦の身上に怪しい事がありますから、これを調べたいと思召ぼかしましたが、夫婦とも死んで居ります事ゆえ、吟味の手懸りがないので、深く心痛いたされまして、漸よう々くに幸兵衛が龜甲屋お柳方へ入にゆうふ夫になる時、下谷稻荷町みやのやもじさくの美濃屋茂二作と其の女房お由よしが媒なごうど妁ど同様に周旋しゅうせんをしたという事を聞出ききだしましたから、早速お差さし紙がみをつけて、右の夫婦を呼出して白洲を開ひらかれました。

奉行「下谷稻荷町とくべいたな徳平店茂二作、並ならびに妻由さい、其の他名主、代組合の者残らず出ましたか」

町役「一同差添さしぞいましてござります」
 奉「茂二作夫婦の者は長年龜甲屋方へ出入でいりをいたし、柳に再縁さいえんを勧め、其の方共なかだが媒な妁かをいたして、幸兵衛と申す者を入夫にいたせし由じゃが、左様さようか」

茂「へい左様でござります」

由「それも私わたくしども共どもが好んで致したのではございませよんどころん、抛ななく頼たのまれましたので」

奉「如何なる縁をもつて其の方共は龜甲屋へ出入をいたしたのか」

茂「それはあの龜甲屋の先の旦那半右衛門様が、御公儀の仕立物御用を勤めました縁で、私共も仕立職の方で出入をいたしましたので、へい」

奉「何歳の時から出入りいたしたか」

茂「二十六歳の時から」

奉「当年何歳に相成る」

茂「五十五歳で」

奉「由は龜甲屋に奉公をいたせし趣じやが、何歳の時奉公にまいった」

由「へい、私は十七の三月からでございますから」

と指を折つて年を数え、

「もう廿八九年前の事でございます」

奉「其の後兩人とも相変らず出入をいたして居つたのじやな」

茂「左様でございます」

奉「して見ると其の方共実体に勤めて、主人の気に入って居つたものと見えるな」

由「はい、先の旦那様がまことに好いお方で、私共へ目をかけて下さいましたので」

奉「左様であろう、して柳と申す女は何時頃半右衛門方へ嫁にまいったものか、存じて居ろうな」

茂「へい、私が奉公にまいりました年で、御新造は其の時慥か十八だと覚えて居ります」

奉「御新造とはお柳のことか」

茂「へい」

奉「して、半右衛門は其の時何歳であつた」

茂「左様で」

と考えて、お由とさゝやき、指を折り、

茂「三十二三歳であつたと存じます」

奉「当月九日の夜、柳島押上堤において長二郎のために殺害された幸兵衛という者は、如何なる身分職業で、龜甲屋方に入夫にまいるまで、何方に住居いたして居つた者じや」

茂「幸兵衛は坂本二丁目の経師屋桃山甘六の弟子で、其の家が代替りになりました時、暇を取つて、それから私方に居りました」

奉「其の方宅に何個年居つたか」

茂「左様でございます、彼是十年たらず居りました」

奉「フム大分だいぶん久しく居ったな」

茂「へい、随分厄介ものでございました」

奉「其の方の宅において幸兵衛は常に何をいたして居った」

茂「へい、只ぶらく、いえ、アノ経師をいたして居りました」

奉「フム、由其の方は存じて居ろうが、龜甲屋の元の宅は根岸であつたによつて、坂本の経師職桃山が出入ゆえ、幸兵衛が屢々しばしば仕事にまいったであろう」

由「はい」

と云いにかゝるを茂二作が目くばせで止めましたから、慌てゝ咳払いに紛らし、

由「いゝえ、あの私わたくしは存じません」

奉「隠すな、隠すと其の方の為にならんで、奉行は宜よく知つて居おるぞ、幸兵衛が障子の

張替えなどに度々まいったであろう」

由「はい、まいりました」

奉「左様そようであろう、して、幸兵衛が其の方の宅に居った時は経師職はいたさなんだと申す事じゃが、其の方共の家業の手伝でもいたして居ったのか、何うじゃ」

由「へい、証文を書いたり催促や何かを致して居りました」

奉「ム、それでは貸附金の証文の書役などを致して居ったのじやな、して其の貸付金は誰の金じや」

茂「それは、へい私の所持金で」

奉「余ほど多分に貸付けてある趣じやが、其の方如何して所持いたし居るぞ、これは多分何者か其の方どもの実体なるを見込んで、貸付方を頼んだのであろう、いや由、何も怖がることは無い、存じて居ることを真直に申せばよいのじや」

三十三

由「はい、その金は、へい先の旦那がお達者の時分から、御新造様がお小遣の内を少しずつ貸付けになさったので」

奉「フム、然らば半右衛門の妻柳が、出入の経師職幸兵衛を正直な手堅い者と見込んだゆえ、其の方の宅において貸付金の世話をいたさせたのじやな、左様であらう、何うじや」

茂「左様でございます」

奉「由其の方は女の事ゆえ覚えて居るであらう、柳が初めて産をいたしたのは何年の何

月で、男子であったか、女子であったか、間違えんように能く勘考して申せ」

由「はい」

と両手の指を折つて頻りに年を数えながら、茂二作と何か囁やきまして、

由「申上げます……あれは今年から二十九年前で、慥か御新造が十九の時で、四月の二は十日つかに奥州へ行くと云つて暇いとまごい乞いにまいりました人に、且かつ様が塩釜しおがまさま様のお符ふだをお頼たのみなさつたので、私は初はつめて御新造様が懐妊みもちにおなりなさつたのを知つたのでございます、御誕生は正月十一日お蔵開きの日で、お坊さんでございませうから、目出たいと申して御祝儀うぎを戴いたのを覚えて居ります」

奉「ム、柳やなぎが懐妊かいにんと分つた月を存じて居おるか」

と奉行は暫まなこらく眼を閉じて思案をいたされまして、

奉「由其の方はなかく、物覚えが宜いな、然らば幸兵衛が龜甲屋方へ初めてまいつたのは何年の何月頃じやか、それを覚えて居らんか」

由「はい、左様さよう」

と暫まなこらく考えて居りましたが、突いきなり然ぜんに大きな声で、

由「思い出しました」

と奉行の顔を見上げて、

由「幸兵衛が初めてまいりましたのは、其の年の五月絹張きぬはりの行灯あんどんが一对出来るので」と茂二作の顔を見て、

由「それ、お前さんが桃山を呼びに行ったら、其の時幸兵衛さんが来たんだよ、御新造が美しい男だと云って、それ、あの」

と喋るのを茂二作が目くばせで止めても、お由は少しも気がつかずに、

由「別段に御祝儀をお遣なされたのを、お前さんがソレ」

と余計なことを喋り出そうといたしますから、茂二作が気を揉んで睨めたので、お由も気が付いたと見えて、

由「へい、マア左様そういうことで、それから私わたくし共どもまで心安くなったので、其の初めは

五月の二日でございます」

奉「して見ると柳の懐妊の分つたのは、寛政四年の四月で、幸兵衛が初めて龜甲屋へまいったのは同年五月二日じゃな、それに相違あるまいな」

茂「へい」

由「間違まちがいひいません」

奉「そうして其の出しゆつ生しょういたした小児は無事に成長致したか、何うじや」

由「くりく、肥ふとった好いお坊さんでございましたが、御新造のお乳が出ませんので、八王子のお家うちへ頼んで里におやんなさいましたが、間も無くなくな歿なつたそうでございます」

奉「その小児を八王子へ遣る時、誰たれがまいった、親半右衛門でも連れてまいったか」

由「いゝえ、旦那様はお産があると間もなく、慥か二十日正月の日でございました、急な御用で京都へお出でになりましたから、御新造が御自分でお連れなされたのでござります」

奉「柳一人ではあるまい、誰たれか供をいたして参ったであらう」

由「はい、供には良人やどが」

奉「やどとは誰たれの事じや」

茂「へい私わたくしが附ついてまいりました」

奉「帰りにも其の方同道うちいたしたか」

茂「旦那が留守で宅うちが案じられるから、先へ帰れと仰しやいましたから、私わたくしはお新造より先へ帰りました」

奉「柳の実家さとと申すは何者じや、存おじて居おるか」

茂「へい八王子の千人同心だと申す事でございますが、家が死絶うちしにたえて、今では縁の伯母が一人あるばかりだと申すことでございしますが、私わたくしは大横町おおよこちょうまで送って帰りましたから、先の家は存うちじません」

奉「其の方の外に一緒にまいった者は無いか」

茂「はい、誰たれも一緒にまいった者はございせん」

奉「黙れ、其の方は上かみに對し偽りを申すな、幸兵衛も同道いたしたであろう」

茂「へい〜誠まことにどうも、宅うちからは誰だれも外ぐわいにまいった者はござりませんが、へい、アノ五宿ごしゆくへ泊りました時、幸兵衛が先へまいって居りまして、それから一緒にへい、つい古い事で忘れまして、まことにどうも恐入りました事で」

奉「フム、左様さようであろう、して、柳は幾日いくかに出て幾日に帰宅をいたしたか存じて居ろう」

茂「へい左様……正月二十八日に出まして、あのおう二月の二十日頃に帰りましたと存じます」

奉「それに相違さないか」

茂「相違さございません」

奉「確しかと左様か」

茂「決して偽りは申上げません」

奉「然らば追つて呼出すまで、茂二作夫婦とも旅行は相成らんど、町役人共左様に心得ませい……立ちませい」

是にて此の日のお調べは済みました。

三十四

奉行は吟味中お由の口上で、図らずお柳の懐妊の年ねんげつ月つきが分つたので、幸兵衛が龜甲屋へ出入を初めた年月としつきを糺たゞすと、懐妊した翌よくつき月つきでありますから、長二は幸兵衛の胤たねでない事は明白でございますが、お柳は実母に相違ありませんから、まだ親殺しの罪のを遁のがれさせることは出来ません。是には奉行も殆ほとんど当惑して、最早長二を救うことは出来ぬとまで諦められました。

由「私わたしア本当に命が三年ばかり縮まつたよ」

茂「男でさえ不気味なもの、其の筈だ」

由「大屋さんは平気だねえ」

茂「そうサ、自分が調べられるのじゃアないからの事た、此方とらはまかり間違えば捕縛んじばられるのだから怖おっかねえ」

由「今日の塩梅じやア心配しなくつても宜いいようだねえ」

茂「手前てめえが余計なことを喋りそうにするから、己おらア冷々ひやくしたぜ」

由「行く前に大屋さんから教わつて置いたから、襪ば襪ろを出さずに済んだのだ、斯ういう時は兀頭はげも頼りになるねえ」

茂「それだから鰻で一杯飲ましてやったのだ」

由「鰻なぞを喰つたことが無いと見えて、串までしゃぶつて居たよ」

茂「まさか」

由「本当だよ、お酒も彼様あんな好いのを飲んだ事アないと見えて、大層酔つたようだった」

茂「己おれも先刻さつきは甚ひとく酔つたが、風が寒いので悉すつかり皆醒めてしまった」

由「早く帰つて、又一杯おやりよ」

と茂二作夫婦は世話になつた礼れい心こころで、奉行所から帰宅の途中、ある鰻屋へ立寄り、

大屋徳平とくへいに夕飯ゆうめしをふるまい、徳平に別れて下谷稻荷町の宅へ戻りましたのは夕七時ななつは

半過はんで、空はどんより曇つて北風が寒く、今にも降出しそうな気色けしきでございますので、

此の間から此の家の軒下を借りて、夜店を出します古道具屋と古本屋が、大きな葛籠ついでらを其処へ卸して、二つ三つ穴の明いた古薄縁ふるうすべりを前へ拵ひろげましたが、代物しろものを列ならべるのを見合せ、葛籠に腰をかけて煙草を呑みながら空を眺めて居ります。

茂「やア道具屋さんも本屋さんも御精が出ます、何だか急に寒くなって来たではありませんか」

道「お帰りですか、商売冥利みょうりですから出では見ましたが、今にも降つて来そうですね、考えているんです」

茂「こういう晩には人通りも少ないからねえ」

本「左様そうですが天道干てんとうぼしという奴ア商いの有無あるなしに拘かわらず、毎晩めいばん同じ所おんなとけを出して定じょう店みせのようになけりやアいけやせんから、寒いのを辛抱して出て来たんですが、雪になつちやア当分喰込みです」

茂「雪は後あとが長くわるいからね」

と立話をしておりますうち、お由が隣へ預けて置いた入口の締しまりの鍵を持って来て、格子戸を明けましたから、茂二作は内へ入り、お由は其の足で直すぐに酒屋へ行つて酒を買い、貧乏びんぼうじくり徳利を袖に隠して戻りますと、茂二作は火種にいけて置いた炭団たどんを搔かき発おこして、其の

上に消炭を積上げ、鼻を炙りながらブー／＼と火を吹いて居ります。お由は半纏羽織を脱いで袖畳みにして居りますと、表の格子戸をガラリツと明けて入ってまいりました男は、太織ふとおというと体裁が宜うございますが、年数を喰って細織はになつた、上の所斑まんだらに褪はげておる焦茶色の短かい羽織に、八丈まがいの脂染あぶらしみた小袖を着し、一本独鈷いっぽんどうこの小倉の帯に、お釈迦の手のような木刀をきめ込み、葱ねぎの枯葉かれっぱのようなぱつちに、白足袋でない鼠足袋あげしおというのを穿はき、上汐あげしおの河流れを救つて来たような日和下駄ひよりげたで小包さを提さげ、黒の山岡頭巾を被つて居ります。

三十五

誰だか分りませんが、風体ふうていが悪いから、お由が目くばせをして茂二作を奥の方へ逐遣おいやり、中仕切なかじきりの障子を建切りまして、

由「何方どなたです」

「はい玄石げんせきでござるて」

と頭巾を取つて此方こつちを覗のぞ込みました。

由「おや〜岩村さんで、お久しぶりでございますこと」

玄「誠に意外な御無音をいたしたので、併し毎も御壮健で」と拇指を出して、

玄「御在宿かな」

というは正しく合力を頼みに来たものと察しましたから、

由「はい、今日は生憎留守で、マアお上んなさいな」

と口には申しましても、玄石が腰を掛けて居る上り端へ、べつたりと大きなお尻を据えて居りますから、玄石が上りたくも上ることが出来ません。

玄「へい何方へお出でず、もう程のう御帰宅でしょう」

由「いゝえ此の頃親類が災難に遭つて、心配中で、もう少し先刻其の方へ出かけましたので、私も是れから出かけようと、此の通り今着物を着替えたところで、まことに生憎な事でした、お宿が分つて居りますれば明日にも伺わせましょう」

玄「はい、宿と申して別に……実に御承知の通り先年郷里へ隠遁をいたした処、兵糧方の親族に死なれ、それから己を得ず再び玄関を開くと、祝融の神に憎まれて全焼と相成つたじゃ、それからというものは為る事なす事鶯の嘴、所詮田舎では行かん

と見切つて出府しゅつぷいたしたのじやが、別に目的もないによつて、先ず身の上を御依頼申すところは、龜甲屋様と存じて根岸をお尋ね申した処、鳥越へ御転居に相成つたと承わり、早速伺つたら、いやはや意外な凶変、実に驚き入つた事件で、定めて此方こなたにも御心配のこ
と、存ずるて」

由「まことにお気の毒な事で、何とも申そう様ようがございません、定めてお聞でしょうが、お宅うちへお出入の指物屋が金に目が眩くられて殺したんですとサ」

玄「ふーむ、不埒ふち千萬な奴で……実に金かねが敵かたきの世の中です、然るに愚老は其の敵めぐに廻り逢おうと存じて出府致した処、右の次第で当惑のあまり此方こなたへ御融通を願ひに出たのですから、何卒どつか何分」

由「はい、折角のお頼みではございますが、此の節は実まことに融通まことがわるいので、どうも」
玄「でもあろうが、お手許てもとに遊んで居らんければ他たからでも御才覚を願ひたい、利分は天引でも苦しゅうないによつて」

由「ハア、それは貴方のことですから、才覚が出来さいすれば何どの様にも骨を折つて見ましようが、何分今が今と云つては心当りが」

玄「其そこ処を是非とも願うので」

と根強く掛合かけあい込みまして、お由にはなか／＼断りきれぬ様子でありますから、茂二作は一旦脱いだ羽織を引掛ひっかけ、裏口から窃そつと脱出ぬけだして表へ廻り、今帰ったふりで門口を明けましたから、お由はぬからぬ顔で、

由「おや大層早かつたねえ」

茂「いや、これは岩村先生……まことにお久しい」

玄「イーヤお帰りですか、意外な御無音ごがいん、実に謝するに言葉がござらんで」

茂「何うなさつたかと毎度お噂をして居りましたが、まアお変わりもなくして結構です」

玄「ところがお変わりだらけで不結構ふけつこうという次第を、只今御内方ごないほうへ陳述ちんじゆいたして居るところで、実に汗顔あせがほの至りだが、国で困難くわんなんをして出府しゅふいたした処、頼む樹陰こかげに雨が漏るで、龜甲屋様の変事、進退谷きんたいやまつたので已むを得ず推参おしぞんいたした訳で、老人を愍然びんぜんと思召して御救助を何うか」

茂「成程、それはお困りでしょうが、当節は以前と違って甚ひどい不手廻りですから、何分心底に任しません」

と金子を紙しに包んで、

茂「これは真ほんの心ばかりですが、草鞋くわし銭ぜにと思つて何うぞ」

と差出すを、

玄「はい／＼実に何とも恐縮の至りで」

と手に受けて包をそつと披き、中を見て其の儘に突戻しまして、

玄「フン、これは唯た二百疋ですねえ、もし宜く考えて見ておくんなさい」

茂「二分では少いと仰しやるのか」

玄「左様さ、これッばかりの金が何になりましたよ」

茂「だから草鞋錢だと云つたのだ、二分の草鞋がありやア、京都へ二三度行つて帰るところが出来る」

玄「ところが愚老の穿く草鞋は高直だによつて、二百疋では何うも国へも歸られんて」

茂「そんなら幾許欲しいというのだ」

玄「大負けに負けて僅か百兩借りたいんで」

三十六

由「おやまア呆れた」

茂「岩村さん、お前とんでもねえ事をいうぜ、何で百兩貸せというのだ、私わしはお前さんにそんな金を貸す因縁はない」

玄「成程因縁はあるまいが、龜甲屋の御夫婦が歿なくなった暁あかつきは、昔馴染の此方こなたへ継すがるより外に仕方がないによつて」

茂「昔馴染だと思うから二分はずんだのだ、左様そようでなけりやア百もくれるのじゃアない、少いというなら止しましょうよ」

玄「宜しい、此方こつちでも止しましょう、憚りながら零落しても岩村玄石だ、先年売込んだ名前があるから秘術鍼治しんじの看板を掲かげさいすれば、五兩や十兩の金は瞬また、くま間はに入はいって来るのは知れているが、見苦しい家うちを借りたくないから、資本を借りに来たのだが、貴公きこうが然そういう了簡なら、貸そうと申されてももう借用はいたさぬて」

茂「そりやア幸いだ、二分棒にふるところだった、馬鹿ばかくしい」

玄「何だ馬鹿くしいとは、何だ、貴公達は旧もとの事を忘れたのか、物覚えの悪い人たちだ、心得のため云つて聞かせよう、貴公達は龜甲屋に奉公中、御新造様に情夫おとこを媒介とりもつて、口止に貰った鼻薬をちびく貯めて小こ金貸かねかし、それから段々慾よくが增長し、御新造様のくすねた金を引出して、五兩一の下金貸したかねかし、貧乏人の喉のどを搾しめて高利を貪り仕上げた身代、貯

るほど穢きたなくなる灰吹同前の貴公達の金だ、仮令たとえ借りても返さずには置かないのに、何だ金比羅詣り同様な錢貰いの取扱い、草鞋錢とは失礼千万、たとい金は貸さないまでも、遠国から出て来て、久しぶりで尋ねて来たのだ、此様な家へ泊りはしないが、お疲れだろうから一泊なさいとか、また鹿角菜ひしきに油揚の惣菜では喰いもしないが、時刻だから御飯をとかせ辞にも云うべき義理のある愚老を、輕蔑するにも程があるて」

由「おや大層お威張りだねえ、何ですとアノ」

茂「お由黙つていろ、強請ゆすりだから」

玄「なに強請だ、愚老が強請なら貴公達は 人殺ひところしの提灯持だ」

茂「やア、とんだ事をいう奴だ、何が人殺だ」

玄「聞きたくば云つて聞かせるが、貴公達は龜甲屋の旦那の病中に、愚老へ頼んだことを忘れたのか」

と云われて、夫婦は恟びつくりして顔色を変え、顫ふるえながら小さな声をして、

茂「これサ、それを云やア先生も同罪だぜ、まア静かにおしなさい、人に聞かれると善くないから」

玄「それは万々承知さ、此様なことは云いたくは無いが、余あんなり貴公達あんなが因業で吝嗇けちだか

らさ」

由「それじゃお前さん虫がいゝというもんだ、先生お前さん彼の時御新造から百両貰つたじゃありませんか」

玄「百両ばかり何うなるものか、なくなつたによつて、又百両又百両と、千両ばかり段々に貰う心得で出て来て見ると、天道様は怖いもので、二人とも人手にかゝつて殺されたというから、向後悪事はいたさぬと改心をしたが、肝腎の金庫が無くなつて見ると、玄石殆んど路頭に迷う始末だから、已むを得ず幸いに天網を遁れて居る貴公達へ、御頼談に及んだのさ」

茂「それでも私にア一本という大金は」

玄「出来ないというのを無理にとは申さんが、其の金が無い時は玄関を開く事も出来ず、再び郷里へ帰る面目もないによつて、路傍に餓死するより寧ろ自から訴え出て、御法を受けた方が未来のためにならうと観念をしたのさ、其の時は御迷惑であろうが、貴公達から依頼を受けて斯々いたしたと手続きを申し立てるによつて、その覚悟で居つてもらわなければならんが、宜しいかね」

と調子に乗つて声高に談判するを、先刻より軒前に空合を眺めて居りました二人

の夜店商人あきんどが、互いに顔を見合わせ、頷うなずきあい、懐中から捕繩とりなわを取り出すや否や、格子戸をがらりと明けて、

「御用だ……神妙にいたせ」

と手早く玄石に繩をかけ、茂二作夫婦諸共に車坂の自身番へ拘引いたしました。この二人の夜店商人は申すまでもなく、大抵御推察になりましたろうが、これは曩さきに吟味与力吉田駒二郎から長二郎一件の探偵方を申付けられました、金太郎繁藏の両人でございます。

三十七

岩村玄石を縛りあげて嚴重に取調べますと、此の者は越えつちゆうのくに中国射水郡高岡の町医の倅で、身持放埒ほうらちつのため、親の勘当を受け、二十歳の時江戸に来て、ある鍼はり医の家はりいの玄関番に住込み、少しばかり鍼術はりを覚えたので、下谷金杉村かなすぎむらに看板をかけ、幫間たいこ半分に諸家へ出入をいたして居おるうち、根岸の龜甲屋へも立入ることになり、諂おべつか諛おべつかが旨いのでお柳の氣に入り、茂二作夫婦とも懇意になりました所から、主人半右衛門が病氣の節お柳幸兵衛の内意を受けた茂二作夫婦から、他ひとに知れないように半右衛門を毒殺してくれたら、

百両礼をすると頼まれたが、番木鱉まちんの外は毒薬を知りません。また鍼はりには辰るいてん天てんといつてひとつち一打で人を殺す術があるといふことは聞いて居りますが、それまでの修業をいたしませんから、殺す方角がつきませんが、眼の前に吊ぶらさが下さつて居る百両の金を取とり損そこうのも残念と、種々いろくに考えるうち、人体の左の乳の下は心しんこくめいもん谷命門やといつて大切な所ゆえ、秘伝を受けぬうちは無闇に鍼を打つことはならぬと師匠が毎度云つて聞かしたことを思い出しましたから、是が辰天の所かも知れん、物は試しだ一番行やって見ようといふので、茂二作夫婦には毒薬をもつて殺す時は死相が變つて、人の疑いを招くから、愚老が研究した鍼の秘術で殺して見せると申して、例の通り療治をする時、半右衛門の左の乳の下へ思切つて深く鍼を打つたのがまぐれ中あたりで、命門に達したものと見えて、半右衛門は苦痛もせず落命うたいたしましたから、お柳と幸兵衛は大に喜び、玄石の技うでまえ術を褒めて約束の通り金百両を与えて、堅く口止をいたし、茂二作夫婦にも幾許いくらかの口止金を与えて半右衛門を病死と披露して、谷中の菩提所へ埋とりおき葬をいたしましたと逐一旧悪を白状に及びましたので、幸兵衛お柳の大悪人ということが明白になり、長二郎は囚らず実父半右衛門の仇あだ幸兵衛を殺し、敵討をいたした筋に当りますが、悪人ながらお柳は実母でございませぬから、親殺しの廉かどは何うしても遁のがれることは出来ませぬので、町奉行筒井和泉守様は抛よんどころなく、それ／＼の口

うしよ
 書を以て時の御老中の筆頭 土井大炊頭様へ伺いになりましたから、御老中 青山下
 野守様、阿部備中守様、水野出羽守様、大久保加賀守様と御評議の上、時の將軍
 家齊公へ長二郎の罪科御裁許を申上げられました。この家齊公と申すは徳川十一代の將
 軍にて、文恭院様と申す明君にて、此の時御年四十六歳にならせられ専ら天下の御
 政事の公明なるようにと御心を用いらるゝ折柄でございますから、容易には御裁許遊
 ばされず、猶お御老中方に長二郎を初め其の他関係の者の身分行状、並に此の事件の
 手続等を悉しくお訊しになりましたから、御老中方から明細に言上いたされました処、
 成程半右衛門妻柳なる者は、長二郎の実母ゆえ親殺しの罪科に宛行すべきものなるが、
 柳は奸夫幸兵衛と謀り、玄石を頼んで半右衛門を殺した所より見れば、長二郎のためには
 幸兵衛同様親の仇に相違なし、然るに実母だからといって復讐の取扱が出来ぬというは如
 何にも不条理のように思われ、裁断に困むとの御意にて、直に御儒者林大學頭様をお召
 しになり、御直に右の次第をお申聞けの上、斯様なる犯罪はまだ我国には例もなき事ゆえ、
 裁断いたし兼るが、唐土に類例もあらば聞きたし、且別にこれを裁断すべき聖人の教あ
 らば心得のため承知したいとの仰せがありました。

三十八

林大學頭様は、先年坂倉屋助七の頼みによつて長二郎が製造いたした無類の仏壇に折紙を付けられた時、其の文章中に長二郎が伎倆の非凡なることゝ、同人が親に事えて孝行なることゝ、慈善を好む仁者なることを誌した次に、未だ学ばずというも雖も吾は之を学びたりと謂わんとまで長二郎を賞め、彼は未だ学問をした事は無いというが、其の身持と心立は、十分に学問をした者も同様だという意味を書かれて、其の後人にも其の事を吹聴された事でありますから、その親孝行の長二郎が親殺しをしたといつては、先年の折紙が嘘誉になつて、御自分までが面目を失われる事になりますばかりでなく、將軍家の御質問も御道理でございませぬから、頻りに勘考を致されましたが、唐にも此の様な科人を取扱つた例はございませんが、これに引当てゝ長二郎を無罪にいたす道理を見出されましたので、大學頭様は窃かに喜んで、長二郎の罪科御裁断の儀に付き篤と勘考いたせし処、唐土においても其の類例は見当り申さざるも、道理において長二郎へは御褒美の御沙汰あつて然るびよう存じ奉つると言上いたされましたから、家齊公には意外に思召され、其の理を御質問遊ばされますと、大學頭様は五経の内の礼記と申す書物をお取寄せに

なりまして、第三卷目の檀弓だんくうと申す篇の一節ひとくだりを御覧に入れて、御講釈を申上げられま
 した。この所は徳川將軍家のお儒者林大學頭様の飯こわいろ声こわいろを使わなければならぬ所でござ
 います、四書ししよの素読そじくもいたした事のない無学文盲わたくしの私には、所詮お解りになるようには
 申上げられません、或方あるかたから御教示を受けましたから、長二郎の一件に入用いりようの所だ
 けを摘つまんで平たく申しますと、唐の聖人孔子様のお孫きよあきに、※字しは子思と申す方がございま
 して、そのお子を白字はあきは子上しじょうと申しました、子上を産んだ子思の奥様が離縁のちになつて後
 死んだ時、子上のためには実母であります、忌服きふくを受けさせませんから、子思の門人が
 聖人の教おしえに背くと思つて、何故なにゆえに忌服をお受けさせないのをございますと尋ねまし
 たら、子思先生の申されるのに、拙者の妻さいであれば白のためには母であるによつて、無論
 忌服を受けねばならぬが、彼は既に離縁のちいたした女で、拙者の妻でないから、白のため
 も母でない、それ故に忌服を受けさせないので答こたえられました、礼記の記事は悪人だ
 の人ひと殺ころしだのという事ではありません、道理は宜く合あつております、ちようど是この半
 右衛門が子思の所で、子上が長二郎に当ります、お柳は離縁にはなりません、女の道に
 背き、幸兵衛と姦通かじいたしたのみならず、奸夫と謀はかつて夫半右衛門を殺した大悪人であり
 ますから、姦通の廉かじばかりでも妻たるの道を失つた者で、半右衛門がこれを知つたなら、

妻とは致して置かんに相違ありません、然れば既に半右衛門の妻では無く、離縁したも同じ事で、離縁した婦は仮令無瑕でも、長二郎のために母で無し、まして大悪無道、夫を殺して奸夫を引入れ、財産を押し領いたしたのみならず、実子をも亡わんといたした無慈悲の女、天道争でこれを罰せずに置きましよう長二郎の孝心厚きに感じ、天が導いて実父の仇を打たしたものに違いないという理解に、家齊公も感服いたされまして、其の旨を御老中へ御沙汰に相成り、御老中から直ちに町奉行へ伝達されましたから、筒井和泉守様は雀躍するまでに喜ばれ、十一月二十九日に長二郎を始め囚人玄石茂二作、並に妻由其の他関係の者一同をお呼出しになつて白洲を立てられました。

三十九

此の日は筒井和泉守様は、無刃梅鉢の定紋付いたる御召御納戸の小袖に、黒の肩衣を着け茶字の袴にて小刀を帶し、シーという制止の声と共に御出座になりまして、

奉行「訴人長二郎、浅草鳥越片町龜甲屋手代萬助、本所元町與兵衛店恒太郎、下谷稻荷

町徳平店茂二作並に妻由、越中国高岡無宿玄石、其の外町役人組合の者残らず出ましたか」
町役「一同差添いましてござります」

奉「茂二作並に妻由、其の方ども先日半右衛門妻柳が懐妊いたしたを承知せしは、当年より二十九ヶ年前、即ち寛政四子年ねどしで、男子の出しゅっしやう生は其の翌年の正月十一日と申したが、それに相違ないか」

茂「へい、相違ございません」

奉「その小児の名は何と申した」

由「半之助はんのすけ様と申しました」

奉「フム、その半之助と申すは是なる長二郎なるが、何うじや、半右衛門に似て居ろうな」

と云われ茂二作夫婦は驚いて、長二の顔をのぞ覗きまして、

茂「成程能く似て居ります、のうお由」

由「然そうですよ、ちつとも気が付かなかつたが、左様そ聞いて見るとねえ、且那樣にそつくりだ、へい此の方が半之助様で、何うして無事で実に不思議で」

奉「ム、能う似て居おると見えるな」

と奉行は打笑うちえまれました、

奉「半右衛門妻柳が懐妊中、其の方共が幸兵衛を取持つて不義を致させたのであろう」

茂「何ういたしましたして、左様な事は」

由「私わたくしどもの知らないうちに何時か」

奉「何れにしても宜しいが、其の方共は幸兵衛と柳が密通いたして居おるを知つて居つたであらう」

茂「へい、それは」

由「何か怪しいと存じました」

奉「柳が不義を存じながら、主人半右衛門へ内ない々にいたし居つたは、其の方共も同家に奉公中密通いたし居つたのであろうがな」

と星を指されて両人は赤面をいたし、何とも申しませんから、奉行は推察の通りであると心に肯うなずき、

奉「左様さようじやによつて幸兵衛を好きよきように主人へ執成とりなし、柳に諂諛こびへつらい、体よく暇いとまを取つて、入谷へ世帯を持ち、幸兵衛を同居いたさせ置き、柳と密会を致させたのであろう、上かみには調べが届いて居おるぞ、それに相違あるまい、何うじや恐れ入つたか」

夫婦「恐入りました」

奉「それのみならず、兩人は半右衛門の病中柳の内意を受け、是れなる玄石に半右衛門を殺害する事を頼んだであろう、玄石が残らず白状に及んだぞ、それに相違あるまいな、何うじや、恐入ったか」

夫婦「恐入りました」

奉「長二郎、其の方は龜甲屋半右衛門の実子なること明白に相分りし上は、其の方が先月九日の夜、柳島押上堤において幸兵衛、柳の兩人を殺害いたしましたのは、十ヶ年前右兩人のため、非業に相果てたる実父半右衛門の敵を討つたのであるぞ、孝心の段上にも奇特に思召し、青差拾貫文御褒美下し置かるゝ有難く心得ませい、且半右衛門の跡目相続の上、手代萬助は其の方において永の暇申付けて宜かろう」

萬「へい、恐れながら申上げます、何ういう鼻痕か存じませんが余り依估の御沙汰かと存じまず、成程幸兵衛は親の敵でもござりましようが、御新造は長二郎の母に相違ござりませんから、親殺しのお処刑に相成るものと心得ますに、御褒美を下さりますとは、一円合点のまいりませぬ御裁判かと存じます」

奉「フム、よう不審に心付いたが、依估の沙汰とは不埒な申分じや、其の方斯様な裁判

が奉行一存の計はからいに相成ると存じ居おるか、一人の者お処刑に相成る時は、老中方の御評議に相成り上様へ伺い上様の思召をもつて御裁許の上、老中方の御印文ごいんもんが据すわらぬうちはお処刑には相成らぬぞ、其の方公儀の御用を相勤め居つた龜甲屋の手代をいたしながら、其の儀相心得居らぬか、不束者ふつつかものめが」

四十

奉行は高こう声せいに叱りつけて、更に言葉やわらを和わげられ、

奉「半右衛門妻柳は、長二郎の実母ゆえ、親殺しと申す者もあろうが、親殺しに相成らぬは、斯ういう次第ぞんじようちじや、柳は夫半右衛門存生中密夫ちゆうみつを引入れ、姦通致せし廉かばかりでも既に半右衛門の妻たる道を失つて居おる半右衛門に於おて此の事を知つたならば軽うても離縁かいたすであろう、殊に奸夫幸兵衛と申合せ窃ひそかに半右衛門を殺した大悪非道な女じやによつて、最早半右衛門の妻でない、半右衛門の妻でなければ長二郎のために母でない、この道理を礼記と申す書物によつて林大學頭より上様へ言上いたしたによつて、長二郎は全く実父の敵である、他人の柳と幸兵衛を討取つたのであると御裁許に相成つたのじや、萬

助分つたか」

萬「恐入りました」

奉「茂二作並に妻由、其の方共半右衛門方へ奉公中、主人妻柳に幸兵衛を取持つたるのみならず、柳の悪事に同意し、玄石を頼み、主人半右衛門を殺害せつがいいたさせたる段、主しゅう殺ころし同罪、磔はりつけにも行うべき処、主人柳の頼み是非なく同意いたしたる儀に付、格別の御慈ごじ悲ひをもつて十四ヶ年遠島を申付くる、有難く心得ませい」

二人「有難うござります」

奉「下谷稻荷町茂二作家主徳平、並に浅草鳥越片町龜甲屋差配みのしち簀し七、其の方斯様なる悪人どもが自分の差配中に住居いたすを存ぜざる段、不取締に付咎とがめ申付くべき処、此の度は免たひし置ゆるく、以後屹度心得ませい」

奉「恒太郎其の方父清兵衛儀、永なが々く長二郎を世話いたし、此の度の一件に付長二郎平へ生いせいの所業心懸等しとう逐一申立てたるに付、上かみの御都合にも相成り、且かつ師弟じようあいの情じやうあい合あ厚あき段あ神妙の至り誉め置くぞ」

恒「へい、有難う存じます」

奉「玄石其の方儀、半右衛門妻柳より金百両を貰い受け、半右衛門を鍼術しんじゆつにて殺害に及

びし段、不届に付死罪申付くべきの処、格別の御慈悲をもつて十四年遠島を申付くる、有難う心得ませい」

玄「有難うござります」

奉「長二郎親の仇討あだうち一件今日こんにちにて落着、一同立ちませい」

これで此の事件は落着になり、玄石と茂二作夫婦は八丈島へ遠島になつて、玄石は三年目に死去し、茂二作夫婦も四五年の内に死去したのは天罰、斯かくあるべき筈でござい
ます。さて長二郎は死罪を覚悟で駈込訴えをいたしました処、もとより毛筋程けすじほども悪心の
ないのは天道様が御照覧になつて居りますから、筒井様のお調べ、清兵衛のお慈悲願いか
ら、林大學頭様の御理解等にて到頭実父の復讐かたきうちとなり、御褒美を戴いた上、計らず大
身代おしんだいの龜甲屋を相続いたす事になりました、公儀から指物御用達さしものごようたしを仰付けられましたの
で、長二郎は名前を幼名の半之助と改め、非業に死んだ実父半右衛門と、悪人なれど腹を
借りた縁故により、お柳の菩提とむちを葬うため、紀州の高野山へ供養塔を建こんりゆう立し、また相
州足柄郡湯河原の向山の墓地にも、養父母のため墓碑を建て、手厚く供養をいたしました。
右様みぎさまの事がなくとも、長二郎の名は先年林大學頭様の折紙が付いた仏壇で、江戸中に響
き渡りました処、又今度林大學頭様が礼記の講釈ふくしゅうで復讐ふくしゅうという折紙を付けられました珍ら

しい裁判で、一層名高くなつたので、清兵衛達の喜びはいうまでもなく、坂倉屋助七も大に喜び、或日筒井侯のお邸やしきへ伺いますと、殿様が先日腰元島路の申した口上もあれば、今は職人でない長二郎ゆえ、島路を彼方かれかたへ遣わしては如何いかとの仰せに助七は願うところと速すみかに媒酌みやくを設け、龜甲屋方へ婚姻の儀を申入れました処、長二郎も喜んで承知いたしましたので、文政五年うまだし年三月一日いちにちに婚礼を執とり行おこない、夫婦睦むつまじく豊かに相暮しましたが、夫婦の間に子が出来ませんので、養子を致して、長二郎の半之助は根岸へ隠居して、弘化二こうか巳年みじしの九月二日ふつかに五十三歳で死去いたしました。墓は孝徳院長譽義秀居士こうとくいんちようよぎしゅうこじと題して、谷中の天竜寺に残つてございます。

青空文庫情報

底本：「圓朝全集 巻の九」近代文芸資料複製叢書、世界文庫

1964（昭和39）年2月10日発行

底本の親本：「圓朝全集 巻の九」春陽堂

1927（昭和2）年8月12日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

ただし、話芸の速記を元にした底本の特徴を残すために、繰り返し記号は原則としてそのまま用いました。同の字点「々」やカタカナ繰り返し記号「ゝ」と同様に用いられている二の字点（漢数字の「二」を一筆書きにしたような形の繰り返し記号）は、「々」「ゝ」にかえました。

また、総ルビの底本から、振り仮名の一部を省きました。

底本中ではばらばらに用いられている、「其の」と「其」、「此の」と「此」、「彼《あ》の」と「彼《あの》」は、それぞれ「其の」「此の」「彼の」に統一しました。

また、底本中では改行されていませんが、会話文の前後で段落をあらため、会話文の終わりを示す句読点は、受けのかぎ括弧にかえました。

※本作品中には、身体的・精神的資質、職業、地域、階層、民族などに関する不適切な表現が見られます。しかし、作品の時代背景と価値、加えて、作者の抱えた限界を読者自身が認識することの意義を考慮し、底本のままとしました。（青空文庫）

入力：小林 繁雄

校正：かとうかおり

2000年10月31日公開

2003年9月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

名人長二

三遊亭圓朝

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 鈴木行三校訂・編纂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>